

OKAYAMA

岡山ESD推進協議会
20周年記念誌

20th
Anniversary



2005-2025

目次

01		あいさつ	01
02		岡山ESD推進協議会20周年によせて	02
03		祝辞	05
04		岡山ESD推進協議会(RCE岡山)の概要	23
05		20年のあゆみ	36
06		ESDの成果	43

20周年を迎えたRCE岡山：ESD・SDGsの充実と国際評価の年に

岡山ESD推進協議会(RCE岡山)会長
阿部 宏史



岡山地域では、2005年に国連大学が提唱した「ESDに関する地域拠点(RCE)」に賛同し、教育機関、公民館、市民団体、企業、メディア、行政などが参加して「岡山ESD推進協議会」が設立され、「岡山ESDプロジェクト」がスタートしました。この事業は、2005年に国連大学から世界初のRCE7地域の1つに認定され、その後、ワークショップ、人材育成、アワード、海外・国内連携などを通じて、地域全体でESDを推進してきました。RCE岡山の参加数は2025年5月時点で405団体に達しており、RCE参加数として世界有数の規模です。

「岡山ESDプロジェクト」は国際的にも注目されており、2014年にESDの10年間を振り返り、2015年以後を展望する「ESDに関するユネスコ世界会議」は愛知県名古屋市と岡山市で開催されました。RCE岡山はその後、ユネスコが実施した「2016年ユネスコ／日本ESD賞」の対象事業として、世界3受賞案件の1つに選ばれる名誉を得ました。受賞理由では、「様々な分野における団体・組織が緊密に連携し、地域全体でESDを推進している他に類を見ない取組である。他の地域でも応用可能な手法であることが立証されており、持続可能な社会の構築を目指す全世界の地域・都市にとっての素晴らしいモデルである」との高い評価を受けました。

2015年以降のESDは、2013年の第37回ユネスコ総会で採択された「ESDに関するグローバル・アクション・プログラム(GAP)」(2015-2019年)に基づいて、ユネスコを主導機関として進められています。一方で、持続可能な開発(SD)の実現は、全世界が至急に取り組むべき課題です。2015年の国連サミットでは、「誰一人取り残さない社会」の実現を世界の普遍的目標とし、2030年を期限とする包括的な17目標・169ターゲットで具体的に表現し、「持続可能な開発目標(SDGs)」を採択して広めたことは周知の通りです。ESDはSDGsの目標・ターゲットの中にも含まれますが、2019年国連総会においてESDが全てのSDGs達成の鍵になることを示しました。その後、ユネスコはGAPの後継プログラムとして「ESD for 2030」(2020-2030年)を採択しました。

岡山ESD推進協議会と岡山市は、SDGsに合わせたESDプロジェクトの充実・強化を図っています。これまでに、SDGsを明確に取り入れた「岡山ESDプロジェクト2020-2030基本構想」を策定し、市民協働局に「SDGs・ESD推進課」を設置して、ESD活動の推進、SDGsの普及・啓発に努めてきました。岡山市は、2014年の「ESDに関するユネスコ世界会議」に際して、RCE総会となる「第9回グローバルRCE会議」の開催地となりました。本年開催の「第14回グローバルRCE会議」は、2025年10月にRCE岡山で実施することが決まりました。

岡山ESD推進協議会にとって、この会議は設立20周年、2014年世界会議から丸10年を経た節目の集会です。協議会として、REC岡山の成果を国際社会に直接的に提供し、意見交換できるステージと期待しています。

02 岡山ESD推進協議会20周年によせて

岡山ESD推進協議会設立20周年祝辞

岡山市長
大森 雅夫



このたび、岡山ESD推進協議会が設立20周年という節目を迎えられましたことを、心からお喜び申し上げます。

貴協議会におかれましては、あらゆる世代、多様な団体が参加するネットワークを活かし、活動団体への支援、持続可能なまちづくりの担い手やユース世代の育成、公民館・学校・地域コミュニティの取組への支援、優良事例の顕彰など、幅広いESD推進の取組を通じて、持続可能な社会の実現に向け、共に学び、考え、行動する人が集う地域づくりに貢献してこられました。

20世紀後半から地球環境や社会問題を危ぶむ機運が世界的に急速に高まり、2002年の国連総会において、2005年から2014年までの10年間を「国連ESDの10年」とすることが決議されました。このことを契機に2005年4月に貴協議会が設立され、国連大学サスティナビリティ高等研究所から岡山市は世界で最初のRCE(ESDを推進する地域拠点)7地域のうちの1つに認定されました。

貴協議会を中心とした、団体、企業、学校、公民館、地域住民の協働によるESD推進の取組は、2016年に「ユネスコ／日本ESD賞」を受賞されるなど、「ESD岡山モデル」として世界的にも高く評価されており、それが本市における2014年の「ESDに関するユネスコ世界会議」、本年の「第14回グローバルRCE会議」開催につながりました。

これもひとえに、貴協議会に参加され、また共に活動してきた団体・企業・学校等の皆様、地域住民の皆様が20年にわたり地道な取組を継続してきた成果であり、そういった皆様の活動を支援してきた貴協議会のご尽力に深く敬意と感謝の意を表する次第です。

2015年に国連総会で採択されたSDGs(持続可能な達成目標)は、2030年をその目標達成年に定めています。岡山市では、「岡山市第6次総合計画」を着実に実行することによって、SDGsの達成に向けて引き続き取り組んでまいりますが、SDGsの達成には、行政だけでなく、地域住民の方々や団体・企業等の方々のご協力が不可欠であり、また、ESD推進の取組に対して様々な支援活動を実施される貴協議会のお力添えなくしては成しません。持続可能な社会の実現のため、引き続きご協力、ご支援を賜りますようお願い申し上げます。

結びに、栄えある設立20周年を契機として、岡山ESD推進協議会のさらなるご発展並びに関係者の皆様方のますますのご健勝とご活躍を心から祈念いたしまして、お祝いの言葉とさせていただきます。

01

02

岡山ESD推進協議会20周年によせて

03

04

05

岡山 ESD 推進協議会 20 周年に寄せて

岡山市議会 議長
田口 裕士



岡山 ESD 推進協議会の設立 20 周年を心からお喜び申し上げます。

貴協議会は、将来の岡山と世界とともに学び、考え、行動する人が集う地域を目指した ESD の理念・取組に賛同する団体による協議会として 2005 年に 40 数団体から発足し、現在は 400 に近い団体が参加してくださり 20 周年を迎えられました。

多くの方々、団体にご賛同、ご協力をいただきながら、ESD の普及啓発や人材育成、SDGs 達成に向けた取組等様々な活動にご尽力いただいていることに深い敬意と感謝を申し上げます。

思い起こせば、2005 年に岡山が国連大学から世界初の RCE (ESD に関する地域拠点) の一つに認定されて以来、2014 年には「ESD に関するユネスコ世界会議」が岡山市で開催され、2016 年には「ユネスコ／日本 ESD 賞」を、2017 年には「ユネスコ学習都市賞」を受賞される等、着実に成果を上げ、その功績は広く知られるところであります。

現在、私たちは少子高齢化や人口減少、環境問題など、多くの課題が山積する状況の中にあって、一人一人が『住みやすい、持続可能なまちを作っていく』という目標に向かい、問題を認識し、考え、行動を起こし課題を解決していくということがこれまで以上に求められています。

岡山市議会では、これまでに「持続可能な開発のための教育の推進に関する条例」を議員発議により制定した事をはじめとし、ESD の推進を軸とした持続可能なまちづくりを積極的に推進してまいりました。SDGs の達成期限である 2030 年まで残すところ 5 年を切っておりますが、我々岡山市議会としましても、これまで以上に貴協議会と連携を取りながら、目標に向けて努力していきたいと考えております。

岡山 ESD 推進協議会の設立 20 周年を迎えた本年開催の「第 14 回グローバル RCE 会議」が ESD 先進都市岡山の更なる推進の契機となることをご期待申し上げますとともに、関係の皆様方のご健勝をお祈り申し上げ、ご挨拶とさせていただきます。

01

02

岡山 ESD 推進協議会 20 周年に寄せて

03

04

05

06

岡山ESD推進協議会設立20周年を祝して

岡山市教育委員会 教育長
三宅 泰司



岡山ESD推進協議会設立20周年を迎えられましたことを、心からお慶び申し上げます。

本年は、貴協議会設立から20年でありますとともに、2005年から始まった「国連・ESDの10年」が開始され20周年という記念となる年になります。

貴協議会は、これまで岡山ESDプロジェクトの趣旨に賛同する大学、市民団体、企業、行政などの多様なステークホルダーをネットワークで結び、岡山地域の特性に応じたESDを効果的に推進してこられました。

教育委員会におきましても、2007年に公民館事業方針にESDの推進を規定し、2013年には岡山市教育振興基本計画にESDを位置付ける等、学校園や公民館をはじめ、各種教育活動の中でESDを推進しており、今後ますます貴協議会との連携が大切になると考えております。

公民館では、「ESDの推進」を公民館事業の柱に位置付け、社会教育の観点から学びと実践の循環で、地域課題の解決やSDGsの達成に取り組んでいます。また、公民館職員が、ESD研修で自らが学び、共生のまちづくり等を中心とした学習の場づくりや、学んだ人たちが実践につなげられるような取組を、コーディネーターの役割を果しながら各地域で行っています。

例えば、地域を流れる川のゴミはどこから来て、どこに溜まるのかを公民館で学び、川のゴミを拾ったり、川にゴミを捨てない活動に地域の住民や企業と一緒に取り組んだりといった活動を行っています。

また、学校では、「総合的な学習の時間」を中心に、地域の文化や歴史、自然等と関わりながらESD活動に取り組んでいます。子どもたちが、身近な問題を「自分の問題」として捉えるということ、解決のために仲間と協働して考えたり、ときには地域の方の想いに触れたりなど、他者と関わることが大切な視点となっています。

現代は、急激な変化の時代にあり、子どもたちが大人になる頃、どのような社会になっているのか、予測することは難しい状況にあります。だからこそ、今、持続可能で、誰もが安心して暮らせる社会を実現するために、子どもが自分自身のよさや可能性を実感し、他者とのつながりを大切しながら、社会のために取り組む態度や実践力を育むことが非常に重要なことであると考えております。

教育委員会としましても、新しい時代の教育の推進に今後一層の努力をして参りますので、引き続きご支援とご協力をお願い申し上げます。

結びになりますが、岡山ESD推進協議会が20周年を新たな契機として益々ご発展されること、さらには会員皆様のご健勝とご活躍を祈念いたしまして、お祝いの言葉とさせていただきます。

祝　辞

岡山大学 学長
那須 保友



このたび、岡山ESD推進協議会が設立20周年という節目を迎えられたことに、心よりお祝い申し上げます。持続可能な社会の実現に向けた ESD (Education for Sustainable Development : 持続可能な開発のための教育) の推進は、まさに現代社会が直面する課題に応える鍵であり、本協議会が長年にわたり地域と共に積み重ねてこられた取り組みは、国内外から高く評価されています。

岡山大学は、ESD の重要性に早くから着目し、地域連携と国際的視野を両立する形で ESD の普及と実践に取り組んでまいりました。2007年にはユネスコより「ユネスコチェア」を授与され、以降は大学の教育・研究・社会貢献の柱の一つとして ESD を位置づけております。地域に根ざした ESD 活動を通じて、私たちは「学び合い」と「共創」を育む学びの場を広げてまいりました。

岡山市における ESD の取り組みは、まさに本市の特色ある地域資源の活用と、多様な主体の連携によって実現されています。行政、教育機関、市民団体、企業などが一体となった岡山モデルは、世界の他の地域にとっても大いに参考となる先進的な実践であり、その中核を担ってきた岡山 ESD 推進協議会の果たしてきた役割は極めて大きいものです。

本学では、留学生にもこの岡山の ESD の実践に触れ、学び、共に行動する機会を積極的に提供していきたいと考えております。グローバルな視点とローカルな実践が融合することで、多様な文化や価値観を尊重しながら持続可能な社会づくりを担う人材を育成することが、今後ますます重要になると確信しています。ESD は、知識を学ぶだけではなく、「ともにより良い未来をつくる力」を育む教育であり、まさに国際社会が共有すべき価値そのものです。

この 20 年の歩みを礎に、次の 10 年、20 年を見据えた新たな挑戦が今、始まろうとしています。岡山大学は今後も、岡山 ESD 推進協議会と力を合わせ、地域の未来、そして地球の未来を見据えた ESD の推進に取り組んでまいります。

結びに、岡山ESD推進協議会のこれまでのご尽力に深く敬意を表するとともに、今後の一層のご発展と、関係者の皆様のご健勝とご多幸をお祈り申し上げます。

01

02

03

祝辞

04

05

06

教育の力で拓く持続可能な未来と RCE の役割

国連大学サステイナビリティ高等研究所(UNU-IAS)所長
山口 しのぶ



持続可能な開発のための教育に関する地域拠点（RCE）岡山および岡山 ESD 推進協議会の設立 20 周年、誠におめでとうございます。

世界は今、気候変動や生物多様性の喪失、資源の枯渇、不平等の拡大など、複合的な危機に直面しています。国連が発行した『2025 年持続可能な開発目標（SDGs）報告書』によると、2030 年までに達成が見込まれるターゲットはわずか 18% にとどまっており、課題解決に向けた行動の加速が強く求められています。同時に、近年急速に変化する社会情勢や、AI などの新興技術が有する可能性やリスクを的確に把握し、柔軟な取り組みを進めることができなければなりません。社会における様々な変革を実現し、持続可能な未来を築いていく上で、教育の重要性は一層高まっています。教育は基本的人権であるとともに、人々の価値観や行動を見直し、社会を変革する鍵となります。

国連大学は、国連大学サステイナビリティ高等教育研究所を中心に、2005 年より「持続可能な開発のための教育に関する地域拠点（RCE）」を通じて、国際社会が取り組んでいる喫緊の課題と地域の実践を繋ぐ世界的なネットワークを構築してまいりました。2025 年 9 月現在、世界 78 カ国で 200 の地域拠点が RCE に認定され、それぞれの地域社会・文化の特徴を反映した学びと実践が展開されています。岡山 ESD 推進協議会を中心として活動を推進してきた RCE 岡山は、2005 年に認定された最初の拠点の 1 つであり、20 年にわたり先駆的な活動を継続しています。岡山における小中学校、大学、行政、市民団体、企業など多様な主体が連携する地域コミュニティ全体での取り組みは、地域に根ざした ESD の先進的なモデルとして世界的に注目されています。また、岡山 ESD 推進協議会が、国内外の ESD 推進機関と主催する「ESD 岡山アワード」は、世界の優れた実践事例を顕彰することで、ESD 実践者の意欲向上や世界各地での質の高い活動の発展に大きく貢献しています。

2014 年には、国連大学サステイナビリティ高等研究所、RCE 岡山と岡山市の共催で第 9 回グローバル RCE 会議が開催されました。そして、グローバル RCE ネットワークの設立 20 周年という節目に、第 14 回グローバル RCE 会議を再び岡山市で開催できることを、深く意義あるものと捉えております。本会議は、これまでの RCE の実践と知見を踏まえ、その役割を再定義するとともに、持続可能な未来に向けた教育のあり方を展望する貴重な機会になると確信しております。

RCE 岡山および岡山 ESD 推進協議会の推進に携わってこられた皆様のこれまでのご尽力に心より敬意を表し、今後も ESD 活動の先導役として力強く歩みを進められることを期待しております。国連大学サステイナビリティ高等教育研究所も引き続き RCE の取り組みを支援するとともに、多様なステークホルダーと共に、人類と地球の持続可能な未来の実現に向けて取り組んでまいります。

ESDを通じた社会変革のさらなる声を 岡山から世界へ！

立教大学名誉教授 /ESD-J 元代表理事 /ESD 活動支援センター長
(公社)日本環境教育フォーラム理事長
阿部 治



岡山市並びに市民の皆さんと日本と世界の ESD の発展に大きく寄与してきたこの 20 年の歩みを知る者として、岡山 ESD 推進協議会の 20 周年を心から祝福いたします。日本で唯一の ESD 条例の制定、公民館と学校が主体となった岡山方式の ESD は、市民と行政や企業などが一体となり地域に根差したボトムアップ型の ESD として発展し、その後の SDGs と相まって持続可能な地域創生につながるなど岡山市は世界の ESD のモデルとなりました。また ESD ユネスコ世界会議を機に岡山市が設けた ESD 岡山アワードは世界の ESD 推進組織が受賞を目指す国際賞として定着しています。

私は「国連 ESD の 10 年推進フォーラム (ESD-J)」の活動を通じて協議会とのご縁をいただきました。ESD-J はヨハネスブルグ・サミットにおいて国連 ESD の 10 年を政府と共に提案した市民たちがサミット終了後に「ESD の 10 年」推進のために設立した市民組織です。ESD-J は 2003 年以降、全国各地で ESD の 10 年の告知と推進の集いを開催し、岡山市では 2003 年 3 月に岡山ユネスコ協会の協力で開催しました。以後、ESD-J はユネスコ本部や政府、自治体、企業、学校などすべてのステークホルダーと共に ESD を推進する活動を展開し、ESD の 10 年の成功に多大な貢献をしました。岡山市は ESD-J のメンバーでもあります。その後、その取り組みはいつも私たちの背中を押してくれていました。

2003 年以降、私はおそらく 20 回程度、岡山市を訪問し、岡山市や岡山大学等主催の様々な ESD 関連イベントに参加し、協議会の皆さんと交流させていただきました。また私が主催者代表を務めた ESD-J 全国ミーティング 2013 in 岡山や岡山での ESD テーマ会議 2013 では、ESD の先進地岡山に学びながら翌年の ESD ユネスコ世界会議と 2015 年以降の ESD の推進に向けて議論したこと今でも覚えています。また私は立教大学において日本初の ESD 研究機関である ESD 研究センター（現、ESD 研究所）を設立し、ESD の大学間ネットワークの構築にも努めてきましたがここでも岡山大学をはじめとする協議会の皆さんの大いなご支援をいただきました。

協議会の 20 年の足跡は ESD の必要性を大いに社会に知らしめたと思いますが、残念ながら世界は ESD が目指してきた環境問題の解決や平和構築、格差の是正や人権の保障といった持続可能な世界とは真逆の持続不可能な世界になってきています。持続可能な社会の創り手を育てる ESD の価値を今こそ声を大にして国内外に広めていくことが求められています。社会変革を視野に入れた協議会のさらなる活動を切に期待しています。

01

02

03

祝賀

04

05

06

岡山市のESD：地域に根ざす学びから世界へ

ユネスコ・アジア文化センター 教育協力部長
大安 喜一



岡山 ESD 推進協議会の設立 20 周年、おめでとうございます。これまでの歩みを振り返る意義深い機会にお声がけいただき、感謝申し上げます。ESD を地域ぐるみで推進されてきた岡山市の実践は、日本のみならず国際的にも注目される先進的な取り組みです。

私が岡山市のESDと関わるようになったのは、2007年に開催された「公民館サミット」がきっかけです。当時、私はユネスコ・バンコク事務所でコミュニティ学習センター（CLC）を担当しており、その準備段階で旧知の岡山大学・山本秀樹先生（現・帝京大学）と再会しました。この再会を契機に、海外との交流事業を通じて、公民館と CLC による ESD 推進に向けた協力が始まりました。たとえば京山公民館での「環境てんけん」など、地域の人々の積極的な参加による持続可能な地域づくりの現場に触れることができ、大きな刺激を受けました。

2014 年には、「ESD 推進のための公民館 -CLC 国際会議」に委員として参加し、多くの海外の方々と意見を交わす貴重な機会を得ました。近年、アジアやアフリカの関係者と話す中でも、この岡山市での国際会議の話題が出ることがあり、こうした場が国境を越えた人と人とのつながりを生み出し、持続可能なネットワークの基盤となっていることを改めて実感しています。

ユネスコを退職後、岡山大学では主に留学生への授業を担当し、その一環で市内各地の公民館を訪問して職員や地域の方々と意見交換できたことは、学生そして私にも非常に有意義な学びの機会でした。また、ESD 推進協議会にも関わらせていただき、政策と実践が多くの対話と協議を経て形づくられていくプロセスを学び直すことが出来ました。現職のユネスコ・アジア文化センターに移ってからも、ESD アワードや公民館の海外交流事業に携わることが出来て大変うれしく思っています。

岡山市の ESD は、行政、教育機関、市民団体など多様なステークホルダーが連携して取り組む点で、国内外から高く評価されています。もちろん、地域ごとに事情や課題は異なりますが、岡山市の実践は単なる成果だけでなく、そこに至るまでの過程、つまり人々がどう考え、活動し、協働しているかという点でも、他の地域への示唆に富んでいると考えます。これまでの蓄積を活かし、他の自治体や海外との情報共有を進めながら、国際的な ESD ネットワークの中核として、岡山市が引き続き重要な役割を果たされることを期待しております。

ESDに関するユネスコ世界会議の思い出を中心に

元岡山市 ESD 世界会議推進局長
浅井 孝司



岡山 ESD 推進協議会設立 20 周年おめでとうございます。

私が岡山市と関りを持ったのは 2014 年秋に岡山市で開催された「ESD に関するユネスコ世界会議」の一連の国際会議を岡山市がホストしたことから始まります。2013 年 4 月に岡山市 ESD 世界会議推進局が発足し、文部科学省からその局長として岡山市に赴任しました。それから 1 年半の準備期間を経て 5 つの国際会議を開催したのですが、今思えば、良く成功裏に終わったなあと思います。世界会議推進局職員の方々は言うまでもなく、岡山市職員、地元企業の方々、住民の方々などオール岡山という感じで取り組んだ結果だと思います。世界会議に多少なりとも関わった方々にとって、今も心に残っていることが多いのではないかと思います。この会議を通じて世界に ESD 岡山はかなり知れ渡ったのではないでしょうか。この世界会議の成功もあり、2016 年のユネスコ / 日本 ESD 賞を岡山 ESD 推進協議会は受賞しました。それだけでなく、この 20 年、岡山 ESD 活動は世界的にも大きく評価されていると思います。世界中の国々を対象に「岡山 ESD 賞」を出していることも驚くべきことだと思います。

2013 年春に岡山市民を対象に ESD の認知度調査を行いました。その時は、内容を知っている、あるいは、聞いたことあるなど多少の知識がある方はわずか数パーセントでした。1 年間かけて ESD の周知を図り続け、2014 年春には約 20 パーセント強の方が ESD を知っていると答えるまで認知度が広がっていきました。私ももちろんテレビやラジオに出演したり、あちこちで講演するなどの周知活動を行ったことは今も思い出に強く残っています。2014 年秋には約 3000 人近い外国人の方が岡山を訪れ、会議に参加してくれたことはとてもうれしかったです。

私が岡山で過ごした時間はわずか 1 年 9 か月でしたが、とても充実した日々でした。その後いまも岡山との繋がりは切れていません。当時一緒に仕事をした人たちや ESD 活動に従事している方々とは今も交流があります。ESD は文字通り続していくものであり、岡山の ESD 活動も更に発展していく信じています。20 周年をお祝いすると同時に活発に ESD 活動が続していくことを祈念しています。

01

02

03

祝辞

04

05

06

「ユネスコスクール高校」からの思い出とお祝い

元 岡山県立矢掛高等学校(ユネスコスクール高校)勤務
現 岡山県立倉敷中央高等学校 勤務
教諭
高木 潤



創設 20 周年、おめでとうございます。

「岡山県ユネスコスクール高等学校ネットワーク」からもお祝いの気持ちをお伝えさせていただきたいと思います。

我々が印象深く感じているのは、2014 年。岡山市で「ユネスコスクール世界大会・高校生フォーラム」が開かれることになった頃の話です。当時県内に 10 校ほどあったユネスコスクール高校の一つ(矢掛高校)に勤務していた私は、次々に明かされてくる世界大会の事前情報に日々恐怖を募らせていました。どうやらその大会では、世界中から何百人の生徒と教員が集まって来るらしい。大会は何日間にもわたり全て英語での発表や話し合いが行われるらしい。そして何よりも、この大会の運営は「ユネスコスクール高校生」が自分たちで行っていくということらしい…と。「高校生」が自分たちで…って…、そんなこと出来るの?という心配。期待とか楽しみとかは一切なくて(笑)、ただただ不安と心配が渦巻く恐怖の世界大会!生徒らを指導していく「教員」という立場からすると、正直これは無理でしょう?!というのが最初の頃の感想(悩み)でした。

しかしそんな不安だらけの状況の中、いつも優しく積極的なサポートをしてくださったのが「岡山 ESD 推進協議会」の皆様でした。まだ「ESDって何?」というぐらいの知識レベルだった当時の我々に対して、分かりやすくてためになる専門家の先生方をたくさん紹介してくださり、いろいろなヒントが満載の関連団体の方々と学校を繋いでくださり、事前ミーティングや研修会で使う施設の確保や、放送機器や通信機器などの手配、更には国内外との連絡調整の司令塔役から、今後の学習活動のアドバイス役に至るまで、施設、情報、お金、人材、道具、コンセプトなど、様々な面で足りないところをしっかりサポートしていただきました。不安で一杯だった我々に、いつも笑顔で「大丈夫ですよ、やってみましょう!」と力強く後押ししてくださったことは、今でも印象深く思い出される「胸アツ」な思い出となっています。

結果、「世界大会」は大成功に終わりました。そしてその成功によって自信をつけた我々は、世界大会の翌年から新たに「岡山県ユネスコスクール高等学校ネットワーク」という、県内高校の ESD に関する持続可能な学習ネットワークをみんなの手で作り出すことができました。全国でも類を見ない新たな組織づくりの試みだったので少し臆するところもありましたが、「大丈夫、やってみましょう!」の精神で(^o^)/。この新たな「ネットワーク」が発足してからも「推進協議会」の皆様との御縁は今でもずっと続いています。毎年秋の「実践交流会」や海外ユネスコスクール高校生との「交流企画」などでは、我々の活動をガッチリ支えていただいており、「推進協議会」の皆様のこれまでのノウハウと人脈と実績が、我々の大きな刺激と励みになっています。今後のますますの発展と持続可能な連携活動を願いながら、お祝いの気持ちをお送りいたします。

私とESDの10年

清心中学校・清心女子高等学校 英語科
兼田 紗綺



岡山ESD推進協議会が創設20周年という大きな節目を迎えられましたこと、心よりお慶び申し上げます。貴協議会におかれましては2005年の設立以来、岡山地域における「持続可能な開発のための教育(ESD)」の推進に尽力され、分野の垣根を越えて地域社会と連携し、次世代を見据えた学びと実践の場を築いてこられました。その活動一つひとつが地域の未来を育む大きな力となっていることに、深く敬意を表します。

私とESDとの出会いは2015年、私が高校1年生のときでした。校内外のESD活動に取り組み、その後高校2年生の夏には約1週間のカンボジアスタディツアーに派遣していただきました。現地の方々との対話や学校訪問などを通してカンボジアの現状や貧困を肌で感じ、深く心を揺さぶられたことを今でも覚えています。「世界の課題」は教科書の中だけではなく現実に存在しており、自分も地球市民のひとりとして何かできることがあるのではないかという思いに駆られました。

帰国後は地域のESD活動にも積極的に参加し、多様な世代や背景を持つ人々と対話を重ねました。さらに人の出会いや考えを深めていく過程を通して、自分自身が変わっていく感覚を何度も味わうとともに、ESDの精神が自らの成長の糧になることを確信しました。対話や経験を通して多くの価値観に触れたことから私は、「教育こそが社会を変える力を持っている」と改めて実感しました。またその想いが、教師を目指す大きな原動力となりました。

私は現在、母校に赴任して高校の英語教師の立場からESDの精神を生徒に伝える日々を送っています。そして教壇に立つ中で、特に生徒に「考え続けること」の大切さを伝えることができるよう心がけています。生徒がまずは自分の考えを持ち、それに固執することなく他者と関わる中で見方や考え方を広げていくことができる、そのような学びの姿勢を育みたいと考えています。

教育の力は目に見える成果がすぐに現れるものではありませんが、確実に次世代へつながっていく力です。私自身も岡山という地域で、ESDを支える一人の教育者として生徒とともに学び、考え続ける姿勢を大切にしていきたいと思います。

末筆になりましたが、岡山ESD推進協議会の今後ますますのご発展を心よりお祈り申し上げるとともに、持続可能な社会の実現に向けた歩みが、次の世代へと確かに引き継がれていくことを願っております。

01

02

03

祝辞

04

05

06

世界の ESD 推進に貢献する岡山 ESD 推進協議会 20周年へのご祝辞と御礼

仙台広域圏 RCE/ 宮城教育大学 教授
市瀬 智紀



「岡山 ESD 推進協議会」は、2005 年 6 月に国連大学から世界初の「ESD の地域拠点（RCE）」の 1 つに認定されました。仙台広域圏 RCE も、同年 6 月に RCE に認定されたので、ともに世界で最初に認定を受けた Initial7 の一つです。その後、2011 年に 3 月 11 日に東日本大震災が発生したことから、当該地域では、2015 年の国連世界防災会議の開催や「防災環境都市」としての発信に注力して参りました。一方、岡山市は 2014 年に「国連 ESD の 10 年」最終会合を開催され、ESD 推進のための公民館 -CLC 国際会議、第 9 回グローバル RCE 会議、ユネスコスクール世界大会、教師教育に関する国際会議等を主催されました。当時私もそれらの会議にファシリテーター やオーガナイザーとして参加させていただきましたこと思い起こします。

そして、11 年後になる本年 10 月に第 14 回グローバル RCE 会議の開催都市として、再び岡山市様が選定されたことを心よりお慶び申し上げます。岡山 RCE は 2016 年に岡山 ESD プロジェクトがユネスコ / 日本 ESD 賞を受賞され、また 2013 年から 2024 年の間に岡山の取組が RCE 最優秀賞を 6 度受賞されるなど、世界の ESD の地域レベルでの推進に多大な貢献をされましたことに心より感謝と敬意を表します。今後 10 年の指針となる新アジェンダ「RCE 岡山宣言 2025 (RCE Okayama Declaration (ROD) 2025)」のご提案に期待いたしております。

01

02

03

祝辞

04

05

06

学び合い支え合うESDのネットワーク

RCE 横浜事務局 横浜市みどり環境局長
鈴木 貴晶



岡山ESD推進協議会設立20周年、誠におめでとうございます。心よりお祝い申し上げます。岡山地域におけるESDの推進を担ってこられた岡山ESD推進協議会は、RCE岡山として世界に先駆けて認定された地域の一つであり、持続可能な社会づくりの先導的な役割を果たしてこられました。その歩みに深く敬意を表します。

岡山ESD推進協議会の皆様が、教育機関や市民団体、企業との連携を通じて、多様な視点からESDを推進し築いてこられた成果は、地域社会における持続可能な発展の模範です。特に、岡山と横浜は、行政が中核となってネットワークを支えるという共通点を持っており、これまでも実務者会議などを通じて、地域の特性を活かしたESDのあり方や、行政の果たすべき役割について意見交換を重ねてまいりました。価値観や課題を共有し、学び合えたことは大きな励みとなっております。

2027年には横浜で「GREEN×EXPO 2027」が開催されます。ESDの理念である持続可能な未来に向けた学びと行動を世界に発信する絶好の機会となると確信しています。

引き続き、岡山の皆様、全国のRCEの皆様と一緒に、地域の特性を活かしたESDの実践を通じ、持続可能な社会の実現に向けた取組を続けていけることを楽しみにしております。

01

02

03

04

05

06

愛知・名古屋から見た岡山市のESD

中部ESD拠点 / 中部大学国際ESD・SDGsセンター長・教授
古澤 礼太



国連大学認定のESD地域拠点（RCE）の立ち上げメンバーとして、これまで20年間にわたって国内外のRCE活動をけん引してこられた岡山の取組に心より敬意を表します。

私は2007年に設立したRCE中部（中部ESD拠点）の事務局長として、長く岡山の皆さんと交流をさせていただいてきました。出会いは2005年に開催された愛知万博にさかのぼります。会場内の「地球市民村」で開催された万博はじめてのESDイベントで、岡山市の生徒さんらが活動を発表しました。NGOリーダーからの厳しくも真剣なコメントに接している彼らの姿を見て、ESDのはじまりを感じたことを思い出します。

愛知・名古屋から岡山ESD推進協議会への今後の期待は、流域圏のESD活動に関する連携です。2021年に策定された「岡山ESDプロジェクト2020-2030基本構想」には活動対象地について、岡山市を中心としつつも「行政区域に拘らず、岡山県内の河川流域、都市圏などの広域における関連組織と連携を図る」という画期的な方針が盛り込まれています。森里川海の繋がりに関する議論が国内外で盛り上がりを見せる中、具体的な連携ができるることを願っています。

未来につなぐ

特定非営利活動法人ハート・オブ・ゴールド 代表理事
有森 裕子



岡山 ESD 推進協議会の設立 20 年の節目を心からお慶び申し上げます。

ESD という耳慣れない言葉を市民に広く知ってもらうため、岡山市が ESD のキャッチフレーズを募集していた頃、岡山弁で「ESD はえーですでー」と、スタッフと繰り返していたことを思い出します。「持続可能な社会」に向けた教育や活動が活発になり、今では SDGs という言葉があらゆるところで飛び交う時代となりました。

ハート・オブ・ゴールドは、主にカンボジアでスポーツや教育をとおして、技術移転や課題解決による自立支援と人材育成を行っています。活動すべてが「持続可能な社会」を目指しています。この活動を岡山の子ども達にも知ってもらいたいと、早い時期から ESD プロジェクトに参加しました。国際理解・国際協力の出前授業を行ってきたなかで、児童や生徒の発見や驚き、共感、思考、そして行動に、未来への希望を見つけることが多々ありました。この子ども達が、これから日本や世界を作っていくのだと思うと、ワクワクしました。

また、ESD プロジェクトをとおして、同じ目的を持って多様な活動を行う仲間が、岡山にたくさんいるということも知りました。小さな種が花を咲かせ実となり、更に次の世代へと継ぐように、ひとつ一つが、とても大事な活動です。それを支え、繋ぎ、また岡山を世界から注目される ESD 活動先進市域へと牽引した貴会の功績と、すべての関係者の皆様に、改めて深く敬意と感謝を表します。

次の 10 年、20 年と進んでいくなかで、共に生きていく社会をより良くするために、ひとり一人の身近なこととして、更に多くの人が ESD 活動に参加されることを心より願っています。

ウエルビーイングな輝ける未来を みんなで創出しよう！

岡山ユネスコ協会会長
岡山市京山地区 ESD・SDGs 推進協議会会長
池田 満之



岡山ESD推進協議会設立20周年、おめでとうございます。今日に至る岡山でのESDの取組の初期メンバーの1人として、大変うれしく、かつ、とても誇らしく思います。

2002年に南アフリカ共和国で開催されたヨハネスブルグ・サミット（持続可能な開発に関する世界首脳会議）、わが国が「国連ESDの10年」を提唱したこのサミットのサイドイベントとして、ユネスコが主催した「持続可能な未来のための教育会合」の「ESDの背景・場面」セッションで、私は岡山市特別代表として「持続可能な都市を目指して」と題した岡山市の発表と提案をさせてもらいました。岡山でのESDはここから大きく世界の中で歩み出したように思います。2003年に創設されたESD -J（現：持続可能な開発のための教育推進会議）にもいち早く加わりました。私の地元である岡山市京山地区でも、2004年からESDの取組を、岡山市京山地区ESD環境プロジェクト（岡山KEEP）としてスタートしました。「国連ESDの10年」が始まった2005年、4月に本協議会を発足させてからは、同年6月8日に岡山で第2回目のESD円卓会議を開催し、同月29日に国連大学からRCE（ESDに関する地域の拠点）に認定されました（世界で最初に認定された7地域の1つでイニシャルセブンと呼ばれています）。

その後もユネスコ主催の国際ワークショップの岡山開催など、世界のESDの牽引役的役割を果たしてきました。岡山市京山地区でも、2006年には岡山市京山地区ESD推進協議会を設立し、岡山市における地域協議会の先駆的な役割を果たしてきました。

こうした岡山での取組は、2014年の「国連ESDの10年」の最終年に、愛知県名古屋市及び岡山市において開催された「ESDに関するユネスコ世界会議」に結実していったように思います。2015年以降、SDGsが始まってからも、岡山では持続可能な社会を目指す国際目標としてのSDGsと、人材を育成するESDをセットにして現在に至る取組が進められていることは、とても誇らしいことだと思っています。SDGsの目標年である2030年が近づいてきましたが、世界は持続可能な社会の構築にはまだほど遠い状況にあります。2030年以降の国際目標についての議論も始まり出していますが、岡山でも世界を牽引するくらいの気概をもって、先駆的にポストSDGs、ビヨンドSDGsに向けた取組が動き出しています。世界と共に目指す持続可能な社会ですが、これまで世界のESDを牽引してきた岡山としては、これからも先駆的にESDに取り組み、ウエルビーイングな輝ける未来をみんなで創出していきましょう！

01

02

03

祝辞

04

05

06

岡山ESD推進協議会 設立 20 周年を祝して

特定非営利活動法人岡山 NPO センター 代表理事
高平 亮



岡山 ESD 推進協議会（岡山地域「持続可能な開発のための教育」推進協議会）が設立 20 周年を迎えたこと、心よりお祝い申し上げます。2014 年の「ESD に関するユネスコ世界会議」の開催をはじめ、「ユネスコ / 日本 ESD 賞」の受賞などにより、ESD の先進都市として岡山市の存在を世界に広めただけでなく、「岡山 ESD プロジェクト基本構想」に基づき、公民館やユネスコスクール等を拠点とした学びと実践の機会を提供し続けたことにより、岡山市民のみならず、多くの ESD 実践者に学びと勇気をもたらされました。これまで岡山 ESD 推進協議会に関わられた皆様のご尽力に心からの敬意を表し、感謝を申し上げます。

当法人では、ユネスコ世界会議が開催された 2014 年から「ESD・市民協働推進センター」事業を開始しており、岡山市との協働によって岡山 ESD プロジェクトの普及に努めています。事業開始当初は 250 程度であったプロジェクト参加団体は 2025 年 5 月現在で 405 団体まで増え、ESD を実践する組織、機会は着実に広がり続けています。また、プロジェクト参加団体の活動の充実を目的として実施されている「岡山 ESD プロジェクト活動支援助成金」においても、参加団体からの事前相談を通じて個々の活動内容が年々深化していることを実感しています。これらの変化に岡山 ESD 推進協議会の 20 年間に及ぶ取組が影響していることは間違いない、プロジェクトの普及を担う立場にいることで、岡山 ESD 推進協議会、岡山市、そして市民が積み重ねてきた学びと実践の成果を身近に感じているところです。

これから地域・社会の動向を予測することは困難であり、決して明るい材料ばかりではありませんが、だからこそ多様な視点を持ち、持続可能な社会に向けて、学び、実践し、伝承していく ESD の価値がますます高まる時代になると言えます。持続可能な開発目標（SDGs）や ESD に関するグローバル・アクション・プログラム（GAP）などを取り入れたグローバルな視点と岡山市に根付いたローカルな視点を合わせ持ち、柔軟かつ着実に ESD を推進してきた岡山 ESD 推進協議会が、岡山市だけでなく全世界に対して、これからの社会を切り開く知恵と勇気を与える存在となることを大きな期待を込めて見守させていただきます。また、微力ながら私たちもその一員となれるように研鑽を重ねてまいります。

最後に貴協議会のさらなるご発展と関係者の皆様のご健勝・ご多幸を祈念いたしまして、お祝いの言葉とさせていただきます。

ESDならではの対話がもたらす学びを糧に、実践へ。

特定非営利活動法人岡山 NPO センター
地域連携センター 主任アドバイザー
野崎 晴貴



岡山ESD推進協議会の設立20周年、誠におめでとうございます。持続可能な社会の実現に向けて、岡山に根差し、岡山の多様な組織とともに、グローバルな視点も取り入れた独自の「ESD」を展開されてきたこと、心より敬意を表します。

岡山ESD推進協議会との出会いは、2018年度のESDコーディネーター研修です。就職して2年目、やりたいことが見えてきつつある一方、それを言語化できるほどに落とし込めてはいない頃でした。

3回の集合研修と1回の個別相談を通じて、実践事例を学びながら参加者それぞれが「ESD企画書」を作成するもので、グループワークが多く取り入れられた内容でした。「学ぶ」と聞いて座学中心をイメージしていた私は、ワークやグループで話すことの多さに驚かされました。

対等に話を聞き、意見を伝えられる場であることがわかるにつれ、率直な思いを吐露できるようになりました。そうして出てきた言葉と、それに対する周りの方々のリアクションから、ESD企画書の骨組みがつくられていったように記憶しています。「受け止めて、返す。」このシンプルな繰り返しの中で学びが深まるなどを、頭で理解するよりも先に、体感したような心地でした。

このような研修を経て、2019年度からは協議会の様々な事業に携わさせていただいている。重点取組「③ユース・人材育成」「④地域コミュニティ・公民館・学校でのESDやSDGsの推進」「⑥ESD活動の拡大」と内容は多岐にわたります。

主に、事業に関わる方々と共にその場をつくるコーディネートをさせていただいておりますが、そのためのやり取りから私自身も毎回多くの学びを得ています。特にユースに関する取組では、ユース一人ひとりと向き合うこと、対話を重ねることを大切にしてきました。こうした高質な学びや対話の場を、多様な立場や年代の方々とご一緒できていることを光栄に思います。

SDGsの達成が難しいとされる中、学びを糧に実践をひとつでも前に進めていくことが喫緊の課題です。気候危機や格差の拡大などによって、持続可能性がますます危ぶまれる社会を長く生きるのはユースです。「こんな社会」を「豊かでレジリエントな社会」に変えていくために、組織や世代の枠を超えて、学び合いながら取組を進めていくことが求められます。

希望や期待をもって持続可能な未来を想像、そして創造できる岡山地域をつくるために、岡山ESD推進協議会のさらなる発展と熱意ある事業展開に期待しています。

01

02

03

祝辞

04

05

06

祝辞

岡山商工会議所会頭
松田 久



今日の岡山ESD推進会議の出発点は現在運営委員長で岡山ユネスコ協会会長を務める池田満之さんの20年以上にわたる地道な活動に端を発すると思います。当時、岡山地域におけるESDの展開は京山地区の公民館を中心とする活動が特徴的で、小学生から町内のご高齢者までもが楽しく寄り添いながらネットワークを構築してきたことがコアになっています。この子供たちが10年もたてば成人し、自然とESDの重要性を理解した社会人となり、実践するようになります。

岡山ESDの活動が始まった頃、私は絵図町に住んでおり、自宅前を流れる観音寺用水では、水量が少ない時には、池田さんを中心として子供たちがご高齢者とともに用水に入って、藻を観察し、小魚や川エビを掬いながら、柔軟な笑顔と屈託のない笑い声に包まれて、自然と環境の変化や身近な自然との共生を体感している姿を、私は何度も見かけておりました。

池田さんとは長く付き合いがありますので、自宅を出たところで、たまに声をかけていただいたことがあります。「皆さん何をしていらっしゃるのですか?」と尋ねた当時の私はESDに深い理解を持っておらず、不思議な光景に感じていたのを覚えています。池田さんは周囲を率いるというより、自発的に理解を促すような、暖かいリーダーシップを發揮されており、子供たちも自然とその姿を受け入れていたと感じています。

池田さんは2002年に南アフリカで開催されたサミットにおいて「持続可能な都市を目指して」と題した研究を岡山市の特別代表として発表されています。まさに長年に渡る活動です。ちょうどその頃、私は岡山経済同友会に入会し、ESDという概念にやっと触れ始めたわけですから、「目覚めが遅い」と言われば反論の余地はありません。しかし、人間は重要な事柄に正面から向き合った時に変化するものです。それ以来私はESDの普及に地道に取り組み始めました。特に、2014年の国連ESDの10年の総括会議となる「ESDに関するユネスコ世界会議」が愛知県名古屋市とともに岡山が開催地に決まった時には、岡山の活動が世界に理解されたと深い感動を覚えました。その年に私は岡山経済同友会の代表幹事に就任しましたので、全面的に応援する体制をとるとともに、2019年には岡山商工会議所の会頭に就任し、SDGsへの取り組みが地域の中小企業にとって欠かせないキーワードであると強く認識し活動を継続しています。

2030年に設定された目標の一つは、多くの市民がESDを理解し行動に移していることです。また、この活動は終わりがあるわけではなく、継続こそが力です。これからも更なる啓蒙に努めることをお約束します。

01

02

03

祝辞

04

05

06

枠組みを超えた学び合いのネットワークに期待します

岡山トヨタ自動車株式会社 代表取締役社長
梶谷 俊介



岡山ESD推進協議会が設立20周年を迎えたことを心からお祝い申し上げます。国連大学が提唱したRCE構想に基づき、岡山地域の特性に応じたESD推進に向けて2005年4月に市民団体、NPO、学校、大学、企業、行政等の20団体で設立されて以来、岡山ESDプロジェクト基本構想を定期的に策定して活動を展開し、現在では405団体が参加するまでに発展してこられたことに心から敬意を表します。

私が岡山ESD推進協議会に関わったのは、2014年に名古屋市と岡山市で開催された「ESDに関するユネスコ国際会議」に向けた準備に岡山商工会議所としてもかかわりを持つようになった2012年ごろだと思います。その後、2015年にESD岡山アワードがグローバル賞と岡山地域賞の2部門でスタートし、私は岡山地域賞の審査員を務めさせていただきました。岡山県内で多くの方が様々なESD活動をされていることを知り、私自身も多くの学びがありました。当時応募された方の活動に参加する機会や自社の事業に協力いただくこともあります。岡山地域賞は2019年度を最後になりましたが、グローバルに活躍する方を対象としたESD岡山アワードは継続しており、世界に岡山がESDの先進地であることを発信していると思います。

また、岡山市における長年にわたるESDの取り組みが岡山県全体でSDGs活動を推進するバックボーンとなっています。SDGsの優秀な取り組みを表彰するおかやまSDGsアワードが2020年から2024年まで毎年開催され、2023年度からは産官学のSDGsの取り組みを一堂に集めるおかやまSDGsフェアがスタートしました。ここには多くの生徒たちも参加しています。SDGsの実現にはESDは不可欠であり、岡山市にESD活動の土壌があったことが、産官学金言民が連携してSDGsを推進することにつながったと思います。

岡山ESD推進協議会設立20周年の今年は第14回グローバルRCE会議が岡山市で開催されます。これを契機にESD実践の交流がさらに活発になり、様々な人が学び合い、安心して暮らし続ける未来を創るために行動を起こす人が増えることを期待します。ESD推進をベースに相互理解が深まり、全世界でウェルビーイングな社会を構築する中核として、岡山ESD推進協議会が今後ますます発展することを心から祈念いたします。

岡山 ESD 推進協議会 創立20周年に寄せて

山陽新聞社 代表取締役会長
松田 正己



岡山 ESD 推進協議会の創立20周年を、心よりお祝い申し上げます。持続可能な社会を築くためには、地域の課題を自ら考え、解決へ向けて行動に移すことのできる人材の育成が不可欠です。こうした ESD の理念を長年にわたって実践し、力強く牽引してこられた貴協議会のご尽力に、深く敬意を表します。

私が岡山経済同友会の代表幹事を務めていた2018年、国連の提唱する SDGs（持続可能な開発目標）を重点テーマとして掲げ、有識者を招いた講演会や会員企業による事例発表を重ねてまいりました。そこで得られた知見をもとに、2020年には「地域全体で取り組む『SDGs 先進県へ』」と題した提言書を取りまとめています。

産官学に加え、金融、言論、市民を加えた「産官学金言民」の連携を推進するとともに、企業や市民団体の先進事例を公募、顕彰していく「おかやま SDGsアワード」を創設する等、SDGsの掲げる17の目標達成を踏まえた活動に全力で取り組んだものです。それを後押ししてくれたのは、岡山における ESD の実践の蓄積にほかなりません。

すでに学校や公民館などでは、持続可能性や地域課題への主体的な関わりの大切さが共有され、多くの市民もその価値観を自然に受け入れていました。とりわけ、2014年に「ESDに関するユネスコ世界会議」が岡山市で開催されたことは、こうした実績の一つ一つが、国際的に認められた証であると感じております。素地があったからこそ、SDGs も違和感なく地域に根づき、多様な協働が進んだのだと確信している次第です。

ESD と SDGs は「未来を担う人づくり」や「地域の持続性の確保」を目的とし、相互に補完し合う関係にあります。まさに車の両輪ともいえる両者に、岡山が全国に先駆け真摯に取り組んできたことは、これからあるべき社会を導く確かな羅針盤となるに違いありません。

私ども山陽新聞社も、地域の魅力や課題に光を当てる「吉備の環プロジェクト」を2021年に立ち上げ、SDGs の理念を踏まえた情報発信や地域連携に取り組んでおります。今後もメディアとしての責務を果たしながら、持続可能な地域づくりに積極的に携わってまいります。

20年にわたる貴協議会の歩みと蓄積が、今後さらに広がりと深まりを見せ、持続可能で豊かな社会の実現に向けた推進力となることを心より願っております。

01

02

03

祝辞

04

05

06

岡山 - 世界の ESD のパイオニアでありロールモデル

ハンブルク市(ドイツ) ESD コンサルタント
 ハンブルク環境省元職員
 「ハンブルクにおけるサステナビリティ学習」構想創設者
 ユネスコ学習都市に関するグローバルネットワーク(GNLC)ESD 作業部会共同コーディネーター
Jürgen Forkel-Schubert(ユルゲン・フォーケル・シューベルト)



この度、岡山 ESD 推進協議会が設立 20 周年を迎えるにあたり、祝辞を書かせていただく機会をいただき、大変嬉しく思っております。

私は 2006 年に初めて講演のために日本を訪れましたが、当時は日本や岡山についてまったく知りませんでした。その後、「持続可能な開発のための教育(ESD)に関するグローバル・アクション・プログラム(GAP)」(2015-2019 年)の一環で、ユネスコの自治体向け作業部会のリーダーを務めるよう依頼され、岡山 ESD 推進協議会事務局である岡山市 ESD 推進課(現 SDGs・ESD 推進課)の方々と知り合い、岡山について知るようになりました。2015 年に夫婦で個人的に岡山を訪れた際、推進課の職員の方々は私たちを温かく迎えいれ、黒い「烏城」として知られる岡山城や美しい後楽園を案内してくださいました。このように親切にもてなしていただいたことから、私は日本と岡山に強い心の絆を感じるようになり、以来、岡山市とハンブルク市との協力関係の向上に努めています。

岡山市とハンブルク市には多くの共通点があります。ハンブルク市にも 2005 年から ESD のネットワークがありますが、これは私がハンブルク市の環境担当部門で環境教育課長だった時に始めた取組です。「ハンブルクにおけるサステナビリティ学習」構想として知られるこの取組は現在も続いており、2021 年にはドイツの主要都市としては初の政府承認「ハンブルク総合計画 ESD2030 年」を発表しました。さらに、岡山市は 2016 年に、ハンブルク市は 2019 年に、それぞれ ESD のネットワークが評価され、「ユネスコ／日本 ESD 賞」を受賞しました。

また、両市は「ユネスコ学習都市に関するグローバル・ネットワーク (GNLC)」のメンバーでもあり、ESD 作業部会で協力して成果を上げています。両市は、その豊富な経験と自治体による解決策に多くの好例があることから、持続可能性と気候変動といった課題克服に特に貢献をしています。ユネスコが「緑化教育パートナーシップ(GEP)」の一環として提示した「コミュニティ緑化の手引き：気候変動と持続可能性の行動のための生涯学習」の草案で、両市を優れた「学習戦略の実践例」として挙げていることは、理解に足ることであります。

しかし、岡山市がハンブルク市と決定的に違うこと、そして私が岡山市を羨ましく思うのは、「ESD 岡山アワード」です！2015 年から授与されているこの賞では、「ユネスコ／日本 ESD 賞」よりも賞金額は少ないですが、受賞団体代表者は岡山市に招待され、表彰式やハイレベルな会議に出席し、地元の ESD 事業を視察でき、非常に貴重な体験ができます。2022 年には、ハンブルク市が上記の「総合計画」で「ESD 岡山アワード」を受賞し、責任者ラルフ・ベーレンス氏とともに、私はハンブルク市から派遣され岡山市を訪問することができました。この時の主催の協議会事務局の方々の温かさがとても印象に残っています。

このようなユネスコの世界ネットワークへの参画もさることながら、「ESD 岡山アワード」受賞者に心遣いの行き届いた対応をされていることで、「ESD 岡山アワード」の魅力が増しており、世界中から応募が増え続け、ESD としては世界的に認知されるに至っています。日本の ESD 活動について尋ねられると、真っ先に思い浮かぶのが岡山 ESD 推進委員会の活動です。この成功を心から祝福いたします。一方で、行政の実務経験者として、成功の裏側も承知しています。今日のような優秀な事務局職員とさらなる支援がなければ、現在の成功をさらに発展させることは難しいでしょう。しかし、岡山 ESD 推進協議会が今後も戦略的に前進していき、岡山市が成功し続けることを確信しています。

04 岡山 ESD 推進協議会(RCE 岡山)の概要

岡山 ESD プロジェクト 2020-2030 基本構想

まえがき

① 持続可能な社会づくりと ESD の必要性

地球上では、気候変動、生物多様性の喪失、格差の拡大等が進み、将来の世代にわたり恵み豊かな生活を確保するための基盤となる社会環境が、年々損なわれつつあります。また、2020 年から広がりを見せた新型コロナウイルス感染症の拡大など、社会的に大きな影響を与える新たな課題も発生しています。

こうした現代社会が抱える様々な課題を、一人ひとりが自らの問題として主体的に捉え、身近なところから取り組むことで、それらの問題の解決に繋がる新たな価値観や行動の変容をもたらし、持続可能な社会を実現していくことを目指す取組が「持続可能な開発のための教育 (ESD=Education for Sustainable Development)」です。

1987 年に「環境と開発に関する世界委員会」が、提唱した「持続可能な開発 (Sustainable Development)」=将来の世代のニーズを満たしつつ、現在の世代のニーズも満足させるような開発」は世界中から広く支持され、1992 年の「国連環境開発会議(リオサミット)」において、「持続可能な開発」を推進していくためには、教育が重要な役割を果たすことが合意されました。これを踏まえ、2002 年の「持続可能な開発に関する世界首脳会議(ヨハネスブルグサミット)」において、日本政府が NGO と共に ESD 推進を提案し、国連総会での決議を経て、2005 年から「国連 ESD の 10 年」が始まりました。

現在、世界の様々な問題が複雑かつ密接に繋がっており、一部の取組だけで解決することは不可能です。持続可能な社会を実現するためには、私たち自身が環境問題や開発問題等の理解を深め、日常生活や経済活動の場で、自らの行動を変革し、社会に働きかけていく必要があります。ESD の重要性はより一層高まりつつあります。

岡山地域においても、地球規模の課題はもとより、少子高齢化や地域のつながりの希薄化、性的差別や社会的弱者への対応・支援など、共生社会の実現に向けた多様な課題が顕在化しており、様々な人や団体・組織が参画・協働し、広域的な連携を図りながら、あらゆるレベルで ESD を推進していく必要があります。

② 新基本構想策定にあたって

岡山地域では、国連大学が提唱した「ESD に関する地域の拠点 (RCE)」構想に賛同し、2005 年 4 月に岡山 ESD 推進協議会を設立するとともに、「岡山 ESD プロジェクト基本構想」を策定しました。同年 6 月には、国連大学から世界初の RCE の 7 カ所の一つに認定され、それ以降、公民館やユネスコスクールを拠点とした地域における ESD 活動の推進をはじめ、大学、市民団体、企業、行政などの多様な主体が連携し、地域全体で ESD を推進する体制が整えてきました。

特に、2014 年に岡山で開催された「ESD に関するユネスコ世界会議」を契機に、全市域における ESD の普及啓発活動が活発に行われ、地域に幅広く ESD が浸透しました。また、岡山地域で行われてきた、多様な主体の参画による地域コミュニティに根差した ESD 実践は、「ESD 岡山モデル」として世界会議において発信され、関係機関や参加者から高く評価されました。

01

02

03

04

岡山 ESD 推進協議会の概要

05

06

その後、ユネスコにおいて、持続可能な社会の構築を加速させ、ESD 実践を強化するために「国連 ESD の 10 年」以降の枠組として、「ESD に関するグローバル・アクション・プログラム（GAP）」が策定され、岡山 ESD プロジェクトにおいても、2015 - 2019 年の枠組みで新たな基本構想を策定しました。

一方、国連では 2015 年に「持続可能な開発のための 2030 アジェンダ」を採択し、世界全体における経済・社会・環境の三側面を調和させ、誰一人取り残すことなく、持続可能な社会を実現するための先進国と開発途上国が共に取り組むべき普遍的な目標として、「持続可能な開発目標（SDGs）」を示しました。

ESD は SDGs の 4 のターゲット 4.7 に記載されていますが、2019 年の国連総会では、ESD が全ての SDGs 達成の鍵であり、SDGs 全体を支えるものとして位置づけられています。こうした考えを踏まえた、2020 年から 2030 年までを期限とする GAP の後継プログラムとして、「ESD for 2030」が 2019 年にユネスコで策定されました。

「ESD for 2030」では、ESD と SDGs を結び付けることの重要性を強調しており、ESD を強化し SDGs の達成に貢献することで、より公正で持続可能な社会を構築することを目標としています。

ESD 先進地域である岡山地域では、これまで取り組んできた ESD 活動の成果を活かし、持続可能な社会づくりに向けた学びや行動の変容、それに伴う人材の育成をはじめとする ESD の取組をより一層推進し、実践に繋げることで、SDGs の達成に貢献していきます。

そこで、ユネスコ等の国際的な動向や、国の ESD 国内実施計画、更には岡山市の施策の動きも視野に入れ、2030 年を目指した持続可能な社会づくりを推進するため、岡山 ESD プロジェクト基本構想を改定し、「岡山 ESD プロジェクト 2020-2030 基本構想」を策定します。



本文

① 岡山ESDプロジェクトの目指すもの（目的）

本プロジェクトは、岡山地域と地球の未来について、共に学び、考え、行動する人が集う岡山地域を実現すること、及び岡山地域での ESD の取組を通して、世界中で、持続可能な社会づくりの取組が定着し、経済・社会・環境の各分野において調和のとれた、SDGs の達成に繋がる持続可能な社会の実現に貢献することを目指します。

② 目指すべき地域の姿（実現したい未来像・ビジョン）

- (1) ESD の目指す持続可能な社会づくりについて、多くの市民が理解し、行動しています。
- (2) 岡山地域内で自主的・積極的に活動する組織・団体の輪が広がり、持続可能な社会・地域づくりが進められています。
- (3) 国内外や岡山県内のさまざまな組織・団体間のネットワークを活用し、ステークホルダー（組織の活動によって影響を受けるすべての利害関係者）の間で継続的な学び合いが行われています。

③ 基本的な事項

(1) プロジェクトを実施する主体

本プロジェクトは、趣旨に賛同する各組織・機関・団体で構成する岡山 ESD 推進協議会を中心に、各組織・機関・団体が主体的に取り組むとともに、それぞれの立場に応じた役割を担い、協働で実施します。

(2) プロジェクトの対象地域

本プロジェクトの実施地域は、岡山市を中心とした地域を対象としますが、行政区域に拘らず、岡山県内の河川流域、都市圏などの広域における関連組織と連携を図り、ESD の推進を図ります。

(3) プロジェクトの対象分野

本プロジェクトは、持続可能な社会づくりに関する経済・社会・環境のすべての分野の活動を対象とします。

(4) プロジェクトの対象期間

本プロジェクトの対象期間は、「持続可能な開発のための教育：SDGs 達成に向けて（ESD for 2030）」の期間と合わせて 2020 年～2030 年の 10 年とします。ただし、さまざまな情勢の変化に柔軟に対応していくため、期間内であっても適宜見直しを行います。

4 これまでの成果と課題

(1) 成果 ■

本プロジェクトは 2005 年から開始し、岡山 ESD プロジェクト基本構想を策定しました。その後、2015 年から 2019 年の期間を対象とした、「岡山 ESD プロジェクト 2015-2019 基本構想」を新たに策定し、ESD の取組を継続して推進したことで、持続可能な社会づくりに対する市民の気づきと行動の変容が進みました。

①学校や地域コミュニティを中心とした市域全体でのESD推進

- ・公民館やユネスコスクールなどの ESD 地域拠点において、ESD の取組が児童生徒や公民館利用者、教員職員等の意識や行動の変容に対し、着実に繋がっています。
- ・公民館が地域住民の「ESD を実践する場」となり、公民館職員がコーディネーターの役割を担いながら、各地域コミュニティで活躍しています。
- ・小中学校におけるユネスコスクールの取組と連携が進むとともに、高等学校において ESD や SDGs の取組が加速しました。
- ・地域や市域全体で地域コミュニティの将来像や社会課題を話し合うワークショップ等が数多く開催されるとともに、ESD 活動をコーディネートする人材が育っています。
- ・地域での ESD 活動が浸透し、高齢者や外国人居住者の暮らしのサポート活動、野生生物の保護活動等、持続可能なまちづくりに繋がる事例が数多く生まれています。

②あらゆる世代、多様な団体の参加

- ・岡山 ESD プロジェクトへの参加団体数は着実に増加し、岡山地域全体に活動の輪が広がるとともに、各ステークホルダーが連携した取組が多く生まれています。
- ・ユースに向けた ESD や SDGs の取組に多くの参加者が集まり、持続可能な社会の担い手である若者の裾野が広がりました。
- ・ステークホルダーの活動分野については、本プロジェクトの開始当初に比べ、様々な分野に広がりを見せています。
- ・2015 年から開始した「ESD 岡山アワード」事業に対し、岡山地域賞とグローバル賞を合わせ 5 年間で 385 件の応募があるなど、国内外の多様なステークホルダーが参画しました。

③広域的な交流やESD活動による社会づくり

- ・本プロジェクトに係る様々な活動や組織が ESD 関連の広域的な顕彰・表彰を受けるなど、岡山地域は国内外の ESD をリードする存在になりました。
- ・RCE 等の国際会議に参加し、岡山地域の取組を発信するとともに、大学等と連携して ESD に関する国際会議を継続して開催するなど、世界の ESD 推進に貢献しています。
- ・国内外の ESD 関係者と事例の共有や交流を行うことで、地域活動における新たな気づきが生まれ、活動内容がより深まりました。

(2) 課題 ■

岡山 ESD プロジェクトの開始以来、参加団体数は着実に増加し、ESD の具体的な活動事例が増えるとともに、活動分野に広がりが出てきました。しかしながら、持続可能な社会の実現に向けた意識改革や具体的な活動が市域全体には広がっていません。

今後は、国連 ESD の 10 年から GAP にかけての計 15 年間にわたる、岡山地域でのこれまでの ESD の取組成果や評価を活かしながら、「ESD for 2030」の着実な実施に向けて、さらに取組を継続・発展させていく必要があります。

- ①地域コミュニティにおける ESD 活動の連携をより一層深め、地方創生・地域活性化の視点も踏まえつつ、地域課題が SDGs の世界共通の目標と密接に関連していることを意識して、持続可能な社会づくりに取り組む必要があります。また、ESD と SDGs との関係なども含めた発信の充実が求められます。
- ②SDGs が、経済・社会・環境の3側面でバランスの取れた社会を目指す世界共通の目標であることを踏まえ、環境問題や多文化共生、伝統文化の継承など多様な社会課題が複雑化している現状に対し、課題解決に積極的に取り組む人材の育成を強化することが重要になります。
- ③新型コロナウイルス感染症の拡大は、価値観の多様化や市民の意識、行動に大きな変化を生じさせました。現状の課題を把握し、課題解決に向けた取組を図っていくうえで、持続可能な社会づくりを目指す ESD や SDGs の役割は重要になっています。
- ④ESD に関する各分野の中間支援組織との連携を更に促進しつつ、引き続き各地域の ESD 推進ネットワークの拡充強化を図るとともに、ESD 活動の連携・協働を進め、各分野間の相乗効果を高める必要があります。
- ⑤日本経済団体連合会の「企業行動憲章」の改定などを受け、民間企業における SDGs の達成を意識した取組が加速する中、これまでに構築されたネットワークと民間企業との連携が促進されることが望まれます。
- ⑥「ESD for 2030」という新たな世界的な ESD 推進の枠組みを踏まえ、引き続き国際的な ESD の推進に積極的に貢献するとともに、海外のステークホルダーとの交流や国内外への情報発信を進めることができます。

5 本プロジェクトの重点取組

(1) 8つの重点取組

2019年までのプロジェクトの成果と課題を踏まえ、今後10年間、下記の項目について重点的に取り組みます。

①<持続可能な地域づくりの推進>

持続可能な社会づくりに向けた市民の理解を進め、岡山地域及び、それぞれの地域コミュニティごとに持続可能な未来の姿を描くとともに、その実現のための連携・協働を推進します。

②<SDGs 達成に向けた実践>

SDGsの達成に向けたESDの学びの役割を強調しながら、持続可能な社会づくりに向けた実践に繋がる取組を推進することで、SDGsの達成に貢献していきます。

③<ユース・人材育成>

岡山地域の若者が持続可能な社会づくりに参画するための体制を整備するとともに、地域や団体等で ESD 活動をリードする人材を育成します。

④<地域コミュニティ・公民館・学校での ESD の推進>

各学校園や公民館、地域団体等の主体的な取組を支援し、岡山地域の特性を活かした持続可能な地域づくりを推進します。

⑤< 優良事例の顕彰 >

ESD活動のモデルとなる優良事例を顕彰するとともに、多くの市民に発信することにより、活動の活性化と質の向上を図ります。

⑥< ESD 活動の拡大 >

持続可能な社会づくりに向けた活動の輪を広げ、公民館や学校以外でも、ESDに関する地域活動の拠点を増やします。

⑦< 企業・経済団体の取組促進 >

企業や経済団体での ESD や SDGs の取組を推進します。

⑧< 海外や国内との連携 >

海外や国内の ESD 関連組織と一緒に連携します。

(2) 具体的な取組

重点プロジェクトを推進するための主な取組は次のとおりです。

①< 持続可能な地域づくりの推進 >

- ・市民団体、公民館、行政、大学などと連携し、持続可能な社会づくりに向けた課題の解決や、将来ビジョンの創出につながる学びの機会を促進します。
- ・持続可能な社会づくりの取組等を共有し、今後のアクションに繋げていくための市民参加型イベントを実施します。
- ・岡山 ESD プロジェクトに参加する各種団体が、相互に情報交換や交流を行う機会を創出し、連携・協働を促進します。

②< SDGs 達成に向けた実践 >

- ・ESD 活動を活かしながら、環境問題をはじめとする社会課題の解決に繋がる取組を、周辺自治体やステークホルダーと連携して取り組みます。
- ・SDGs の全ての目標達成に向けた ESD の役割を強調し、周辺自治体等の多様なステークホルダーと連携して持続可能な社会づくりを学び実践行動に繋げる機会を創出します。
- ・市民への SDGs の普及と理解促進を図るためにイベントを開催し、日々の暮らしと SDGs の関わりについての新たな気づきと行動の変容に繋げていきます。

③< ユース・人材育成 >

- ・地域コミュニティや社会課題分野ごとに、世代を超えて持続可能な社会づくりへの思いや知恵、技術の継承を図るとともに、持続可能な社会づくりに取り組む若者をはじめとした人材を育成する機会を創出します。
- ・様々な学習拠点や市民団体で、ESD の学習プログラムを企画できるコーディネーターの育成・確保を図ります。
- ・大学や NPO、公民館等と連携して、大学生などの若い世代の ESD 実践者を増やす取組を進めます。

④< 地域コミュニティ・公民館・学校での ESD の推進 >

- ・公民館における ESD 活動を一層推進し、地域や学校、公民館の連携を図ります。
- ・大学と地域コミュニティが結びつく ESD 活動を促進するとともに、社会教育・生涯学習関連施設を活用して ESD を推進します。
- ・ユネスコスクールコンソーシアム（連合体）の ESD 活動を支援し、構成メンバー間の連携や取組の発表、国内外のユネスコスクールとの交流を通じて、活動実践の場を広げます。
- ・岡山市内の全校で ESD を推進するために、ユネスコスクールに限らず全ての学校の教員を対象にした ESD 研修を実施するとともに、教育課程の中に ESD を位置づけ、ESD の視点でよりよい教育課程を編成します。

⑤< 優良事例の顕彰 >

- ・ESD 活動の顕彰のため、「ESD 岡山アワード」を実施します。
- ・国内外の優良事例を共有する機会を設け、ステークホルダーが今後の ESD 活動のヒントを得るなど、活動の活性化と質の向上に繋げます。

⑥< ESD 活動の拡大 >

- ・岡山 ESD プロジェクトの参加団体による新たな ESD の取組や活動の継続を支援するため、活動費の一部を助成します。
- ・各ステークホルダーの ESD 活動について動画やホームページ等を活用して情報発信を行うなど、広く周知、普及に取り組みます。
- ・ESD に取り組む中間支援組織との連携を強化し、ネットワークのハブ機能を活かしながら、地域横断的な活動拠点の拡大を図ります。

⑦< 企業・経済団体の取組促進 >

- ・企業や経済団体と連携し、社会的責任（SR）活動や社会貢献活動を含めた、企業向け SDGs 研修の機会を提供します。
- ・経済団体と連携し、ESD や SDGs に取り組む企業等の情報を広く発信することで、持続可能な社会づくりの取組拡大を図ります。

⑧< 海外国内との連携 >

- ・県内河川流域の周辺自治体で構成する連携組織と協働で、共通する社会課題解決に向けた広域的な取組を推進します。
- ・国内外の公民館、コミュニティラーニングセンター（CLC）との交流を進めます。
- ・国内外の RCE 地域と連携して ESD 活動の共有や交流を進めます。
- ・ユネスコなど海外の ESD 推進組織と連携し、2030 年に向けた岡山 ESD プロジェクトの取組を発信するなど、世界の ESD 推進に貢献します。

⑥ これまでの成果と課題

それぞれの目標達成へ向けた重点取組分野の指標は以下のとおりとします。

① <持続可能な地域づくりの推進>

指 標	現状 (2019)	中間年 (2025)	最終年 (2030)
岡山 ESD プロジェクト参加団体数	307 団体	405 団体	430 団体
岡山 ESD プロジェクトにおける地域拠点でのワークショップの開催件数	20 件	累計 150 件	累計 300 件

② <SDGs 達成に向けた実践>

指 標	現状 (2019)	中間年 (2025)	最終年 (2030)
「おかやま SDGs アワード」応募件数	(2020年75件)	累計 420 件	累計 800 件
「SDGs フェスタ」の1日あたり参加者数	2,250 人	3,000 人	3,500 人

③ <ユース・人材育成>

指 標	現状 (2019)	中間年 (2025)	最終年 (2030)
ESD を実践する人材を育成する研修受講者数	19 人	累計 120 人	累計 220 人
大学・高校、ユース向け ESD 活動の参加者数	累計 3,446 人	累計 11,500 人	累計 19,000 人
若者(20歳代)の地域活動への参加割合	20.1%	25.1%	—

④ <地域コミュニティ・公民館・学校での ESD の推進>

指 標	現状 (2019)	中間年 (2025)	最終年 (2030)
環境パートナーシップ事業に参加する市民の割合	7.9%	10%	12.5%
公民館基本方針重点分野の事業への参加者数	53,000 人	62,000 人	—
公民館と連携した学習や実践活動の実績のある岡山市立中学校区数	36 中学校区	36 中学校区	36 中学校区

⑤ <優良事例の顕彰>

指 標	現状 (2019)	中間年 (2025)	最終年 (2030)
「ESD 岡山アワード」応募件数	累計 385 件	累計 800 件	累計 1,200 件
「ESD 岡山アワード」応募国数	累計 172 か国	累計 400 か国	累計 600 か国

⑥ <ESD 活動の拡大>

指 標	現状 (2019)	中間年 (2025)	最終年 (2030)
岡山 ESD 推進協議会に登録して、ESD に関する講座や情報提供を定期的に行う拠点施設数	135 施設	140 施設	145 施設
岡山市民の ESD・SDGs の認知度	20.9%	30%	30%

⑦ <企業・事業者の取組促進>

指 標	現状 (2019)	中間年 (2025)	最終年 (2030)
岡山 ESD 推進協議会への企業の登録数	36 事業所	50 事業所	70 事業所
企業向け ESD・SDGs 研修の開催数	2 件	累計 15 件	累計 25 件

⑧ <海外国内との連携>

指 標	現状 (2019)	中間年 (2025)	最終年 (2030)
岡山 ESD 推進協議会と国内外の ESD に取り組む機関や団体との交流件数	28 件	累計 180 件	累計 350 件

7 プロジェクトの推進に向けて

(1) SDGs の達成に向けた ESD のあり方

SDGs が目指す持続可能な社会づくりを実現するためには、ESD の役割が重要であることを明確にして、ESD の取組を一層推進します。また、各ステークホルダーの普及・啓発活動の中で、全ての SDGs を実現するための ESD の役割を強調していきます。

(2) 岡山 ESD 推進協議会を中心とした推進体制

本プロジェクトは、国連大学が認定する RCE の推進母体である岡山 ESD 推進協議会を中心に、ESD 推進に賛同する各組織・団体・機関がそれぞれの活動に応じた役割を担い、連携して推進します。

①協議会は、岡山地域の行政、研究機関、学校教育、社会教育、地域コミュニティ、民間非営利活動団体、企業、報道機関等で、本プロジェクトに賛同する各組織・団体・機関で構成します。

②協議会は、岡山地域全体の ESD を推進するために、以下の役割を担います。

(ア) 岡山 ESD プロジェクト基本構想の策定

(イ) プロジェクトの趣旨に合致した活動及びこれに取り組む組織や団体の指定や支援、連携・協働によるプロジェクトの推進

(ウ) ESD に取り組む各組織間の連携や交流の推進、連絡調整

(エ) 地域全体の ESD や SDGs に関する知識・理解の向上

(オ) ESD に取り組む他地域や関係機関との情報交換や交流の推進

③協議会には、運営組織として、委員会、運営委員会、事務局を設置します。

(3) 分野横断的な連携

本プロジェクトの推進に当たっては、岡山市及び岡山市教育委員会の関係部署とともに、専門的な人材育成や情報提供を行う大学・研究機関、社会課題の解決に取り組む組織、企業や経済団体などと、分野横断的な連携を図ります。

また、各団体のハブ機能を有する中間支援組織と連携して、地域全体でネットワークを活かした ESD を推進するとともに、地域の多様な組織等と連携し、持続可能な社会づくりをけん引する代表的な事業の設定を図ります。

(4) 情報提供

本プロジェクトの推進にあたり、ESD に関する各種情報、ニーズ（求められているもの）とシーズ（提供できるもの）の把握を行い、プロジェクト関係組織・個人間の情報交流を促進します。また、情報を求めている対象者にあわせて、マスメディア、インターネット、リーフレット等をはじめ様々な媒体や ESD 抱点施設を活用し、わかりやすい情報発信を行います。

(5) 岡山 ESD プロジェクトの進行管理

岡山 ESD 推進協議会は、毎年、運営委員会による進行管理を行うとともに、中間年の 2025 年に中間的な評価、2030 年に総括的な評価を行います。最終年における評価は、2030 年以降の ESD の更なる効果的な推進につながるよう実施していきます。また、「岡山 ESD プロジェクト 2020–2030」の実施期間中においても、経済、社会、環境の情勢の変化や国際的潮流の動向等を注視し、必要に応じて本基本構想の見直しを検討するとともに、本基本構想に基づく施策についても点検、見直しを図っていきます。

○持続可能な開発のための教育の推進に関する条例

平成26年9月30日

市条例第128号

本市は、長い年月をかけて、先人達により築かれ、維持されてきた里山・里地が広く残されており、他の都市では見られなくなった希少種を含め、多様な野生生物の生息環境が維持されている。

また、古代吉備文化の昔から積み重ねられてきた豊かな歴史や文化遺産が地域の中で大切に保存されているなど、持続可能な暮らしや活動が息づいている。

こうした中、ユネスコ及び日本政府から、2014年の「ESDに関するユネスコ世界会議」の「各種ステークホールダー会合」の開催地として本市が決定されるとともに、2015年以降のESDを実践するグローバル・アクション・プログラムにおいて持続可能な開発のための教育における地方自治体の役割が盛り込まれるなど地域での取組が一層重要なになってきている。

このため、世界全体の10年間にわたる取組成果の総括と、新たな方向性がテーマとなる会議にあわせ、ここに私たちは、持続可能な発展のために欠かすことのできないESDに真摯に取り組み、国内外の地域や組織と連携し、及び協力しながら、地域全体でESDに対する取組をさらに強化し、平和で持続可能な社会の実現に貢献するまちづくりを推進することを決意し、この条例を制定する。

(目的)

第1条 この条例は、豊かな環境と調和のとれた経済の発展を図りながら持続的に発展することができる社会（以下「持続可能な社会」という。）を構築するため、ESDの推進に関し、基本理念を定め、それぞれの責務を明らかにすることにより、現在及び将来の市民の健康で文化的な生活の確保に寄与することを目的とする。

(定義)

第2条 この条例において、次の各号に掲げる用語の意義は、それぞれ当該各号に定めるところによる。

(1) ESD Education for Sustainable Developmentの略であり、持続可能な社会の構築に向け、社会課題と身近な暮らしを結びつけ、新たな価値観を生み出し、行動を変革することを目指す学習や活動全般をいう。

(2) 教育機関 地方教育行政の組織及び運営に関する法律（昭和31年法律第162

号) 第30条に掲げる機関のうち本市が設置する機関をいう。

(3) 市民 本市に居住し、勤務し、又は在学する者をいう。

(4) 市民団体 本市の区域内で活動する団体をいう。

(5) 事業者 本市の区域内で事業活動を行う個人及び法人その他の団体をいう。

(愛称)

第3条 この条例の愛称を「E（えーものを）S（子孫の）D（代まで）条例」とする。

(基本理念)

第4条 ESDは、世代を超えた私たち一人ひとりが、将来世代や地球環境との関係性の中で生きていることの認識とともに、それぞれの地域の自然環境の保全、市民の生活の安定及び福祉の向上並びに文化や歴史の継承に資するとの認識の下に、環境、経済、社会文化その他の持続可能な社会の構築に関わるあらゆる分野において、それぞれ適切な役割を果たすとともに、協働と連携を図りながら、体系的かつ総合的に推進されなければならない。

(市の責務)

第5条 市は、前条の基本理念（以下「基本理念」という。）に基づき、ESDに関する施策を総合的かつ計画的に策定し、及び実施しなければならない。

2 市は、持続可能な社会の実現に関わる多様な主体が、適切に連携・協力することにより、地域内においてESDが促進されるよう、助言その他必要な施策を講じなければならない。

3 市は、社会経済活動における市の果たす役割が大きいことを踏まえて、自ら率先して持続可能な社会の実現に資するよう努めなければならない。

(教育機関の責務)

第6条 教育機関は、基本理念に基づき、自らの教育活動全体の中で総合的にESDに関する取組を行うよう努めなければならない。

(市民及び市民団体の役割)

第7条 市民及び市民団体は、基本理念に基づき、日常生活において持続可能な社会の構築に配慮した行動をとらなければならない。

2 市民及び市民団体は、持続可能な社会づくりに係る諸活動に積極的に参画するとともに、市並びに教育機関若しくは事業者等と連携協力し、ESD活動に努めなければならない。

(事業者の役割)

第8条 事業者は、基本理念に基づき、自らの事業活動において、持続可能な社会づくりに合致する取組を自主的、積極的に講じるよう努めなければならない。

2 事業者は、自らの事業活動が持つ専門性を生かしながら、市民団体等が行う ESD 活動に協力するよう努めなければならない。

(国内外の地域との連携)

第9条 市は、ESD を推進するに当たっては、国際機関、国及び ESD に取り組んでいる国内外の地域と連携を図るものとする。

附 則

この条例は、公布の日から施行する。

岡山ESD推進協議会の20年間のトピックス



2001年(平成13年)

1月

- 岡山市環境パートナーシップ事業開始

2005年(平成17年)

1月

- 「国連持続可能な開発のための教育の10年(DESD)」が開始

2月

- 岡山市長が2月議会の所信表明演説でRCEに取り組むことを表明

4月

- 岡山ESD推進協議会創設
- 岡山ESDプロジェクト開始
- 「岡山ESDプロジェクト基本構想」策定
- ESDプロジェクト活動団体に対する助成事業を創設(現在は「岡山ESDプロジェクト活動支援助成金」として実施)

7月

- 国連大学よりRCE(Regional Centre of Expertise on ESD / ESDを推進するための地域拠点)に「世界で最初に選ばれた7地域の1つ」として認定される



9月

- 第1回「国連持続可能な開発のための教育の10年(DESD)」関係省庁連絡会議開催

10月

- ユネスコ「国連持続可能な開発のための教育の10年(DESD)・国際実施計画」策定

12月

- 「教育基本法(改正)」交付・施行

2002年(平成14年)

8-9月

- 「持続可能な開発に関する世界サミット」(南アフリカ共和国・ヨハネスブルグ)のサイドイベントで環境パートナーシップ事業について報告

- 「持続可能な開発に関する世界サミット」(南アフリカ共和国・ヨハネスブルグ)を開催



ヨハネスブルグサミット

12月

- 岡山市がユネスコ本部に「Save the Earth Citizens Registration Rally」を提案

- 日本政府が提唱した「国連持続可能な開発のための教育の10年(DESD)」が第57回国連総会で採択された

01
02
03
04
05
20年のあゆみ
06

2006年(平成18年)

1月

- 「国連・持続可能な開発のための教育(ESD)意見交換会」開催

7月

- 「第1回岡山ESDネットワーク交流会」開催(現在も岡山ESDプロジェクト活動団体交流会として実施中)

2007年(平成19年)

4月

- 岡山大学がユネスコから「岡山大学ユネスコニア・持続可能な開発のための研究と教育」の認可を受ける
- 岡山市の公民館の事業方針に「ESDの推進」を規定

6月

- 日本国内にESD推進議員連盟発足

7月

- 岡山大学と岡山市が最初の協定である「ESDに関する協定」を締結

2008年(平成20年)

2月

- 岡山市で「第1回国内RCE実務担当者会議」を開催

2009年(平成21年)

4月

- 「国連持続可能な開発のための教育の10年(DESD)」の中間年として、「ESD世界会合」(ドイツ・ボン)を開催

2012年(平成24年)

6月

- 「国連持続可能な開発会議(リオ+20)」(ブラジル・リオデジャネイロ)を開催

9月

- 「生物多様性保全と農業の共生を築く」事業がRCEアワード2012優秀賞を受賞

10月

- ESD推進強化期間として講演会やワークショップなど様々な団体がESDに関連する事業を開催する「ESDウイーク」開始(～以降2020年まで毎年実施)

2013年(平成25年)

4月

- 岡山市教育振興基本計画にESDを位置づけ

11月

- ESDポータルサイト「おかやまESDなび」開設(現在も「おかやまSDGs・ESDなび」として運営中)
- 「地域のESDを推進する京山地区ESD環境プロジェクト(KEEP)」がRCEアワード2013最優秀賞を受賞

2014年(平成26年)

3月

- 「第7回国内RCE実務者会議」(岡山市)を開催

9月

- 「岡山市持続可能な開発のための教育の推進に関する条例」施行



第9回グローバルRCE会議

11月

- 「ESDに関するユネスコ世界会議」の関連会議(ESD推進のための公民館-CLC国際会議、第9回グローバルRCE会議、ユネスコスクール世界大会、ユネスコESDユース・コンファレンス、教師教育に関する国際会議)を岡山市で開催(☆)
- 「岡山ESDプロジェクト-岡山の10年『ESD岡山モデル』と『新生岡山ESDプロジェクト基本構想』」がRCEアワード2014最優秀賞を受賞
- 「ESDに関する閣僚級会合及び全体の取りまとめ会合」(名古屋市)を開催

12月

- 「ESD推進のためのグローバル・アクション・プログラム(GAP)」を開始

01
02
03
04
05
06
20年のあゆみ

2015年(平成27年)

4月

- 「ESD 岡山アワード」を創設(現在も実施中)
- 「岡山 ESD プロジェクト 2015-2019 基本構想」策定
- GAP のキーパートナーに岡山市が認定



ESD 岡山アワード

6月

- 「藤田の子どもたち 地域に学び未来を拓く」が RCE アワード 2015 最優秀賞を受賞
- 「持続可能な開発のための教育(ESD)円卓会議(第1回)」を開催

9月

- 「国連サミット(ニューヨーク)」で「持続可能な開発のための 2030 アジェンダ」(SDGs)が採択

10月

- 「おかやま ESD フォーラム」を開催



ユネスコ学習都市に登録



ユネスコ / 日本 ESD 賞を受賞

2016年(平成28年)

3月

- 岡山市が「ユネスコ学習都市」に登録される

10月

- 「岡山 ESD プロジェクト」が「ユネスコ / 日本 ESD 賞」を受賞
- 「岡山生きものの里プロジェクト」が RCE アワード 2016 優秀賞を受賞
- 「おかやま ESD フォーラム」を開催。「ESD 岡山アワード」表彰式も同時開催(以降、毎年実施)

01
02
03
04
05
20年のあゆみ
06

2017年（平成29年）

2018年（平成30年）

8月

- 「ユース活動支援助成金」創設（現在も実施中）

2019年（平成31年）

8月

- 「未来わくわく SDGs フェスタ」を開催（以降、毎年実施）



未来わくわく SDGs フェスタ

2020年（令和2年）

2月

- 「SDGs フォーラム 2020」を岡山大学と共に開催



SDGs フォーラム 2020

4月

- 「おかやま SDGs アワード」を産官学民で創設（～2024年まで実施）

12月

- 「SDGs フォーラム in 岡山」を産官学民で開催（～2024年まで実施）
- 第74回国連総会で「持続可能な開発のための教育・SDGs 実現に向けて（ESD for 2030）」の決議採択

2021年（令和3年）

2月

- 「第14回国内RCE実務者会議」を開催（オンライン）

5月

- 「岡山ESDプロジェクト2020-2030基本構想」策定
- 「ESD学生インターンシップ事業」がRCEアワード2021最優秀賞を受賞

11月

2022年(令和4年)

2月

- 「SDGs 海川フォーラム 2022」を開催（以降、毎年実施）



SDGs 海川フォーラム 2022

10月

- 「ESD カフェ ×SDGs シリーズ」が RCE アワード 2022 優秀賞を受賞

2023年(令和5年)

10月

- 「岡山市御南地域における ESD の地域ぐるみの取組（ホール・コミュニティ・アプローチ）」が RCE アワード 2023 最優秀賞を受賞



第 13 回グローバル RCE 会議にて RCE アワード最優秀賞を受賞

11月

- 第 42 回「ユネスコ総会」（パリ ユネスコ本部）にて「ユネスコ教育勧告」の改訂

2024年(令和6年)

12月

- 「SDGs 守ろう！海川プロジェクト」が RCE アワード 2024 最優秀賞を受賞

2025年(令和7年)

10月

- 「第 14 回グローバル RCE 会議」を開催

01
02
03
04
05
20年のあゆみ
06

ESDの効果測定調査研究 まとめ

岡山大学 柴川 弘子

はじめに

- 研究目的と主題
- 方法論の概要
- 調査設計・対象
- 研究目的と課題の整理
- 調査手続きと分析姿勢
- 本章の位置づけ

第1章 理念の内面化と価値観の変容

- 1.1 ESD 理念の受容と再定義
- 1.2 「持続可能性」を自らの行動指針とする転換
- 1.3 語りに見る内面化の兆候

第2章 多様な経験と出会いがもたらす視野の拡張

- 2.1 異文化・異世代との接触が与える影響
- 2.2 比較・憧れ・刺激による自己変容の契機
- 2.3 ネットワーク形成と学びの多様化

第3章 主体性と内省を通じた成長のプロセス

- 3.1 「伝えること」がもたらす自己理解の深化
- 3.2 問いを立てる困難と探究的姿勢の醸成
- 3.3 語りに見る内省の構造と変容の兆し

第4章 協働とコミュニティ形成による実践の展開

- 4.1 協働的実践の経験とリピーター意識
- 4.2 包摂的な関係性と傾聴的態度の育成
- 4.3 ネットワークを基盤とした地域連携の広がり

第5章 当事者意識と社会的行動への展開

- 5.1 地域課題への関与と実践的具体化
- 5.2 「自分ごと化」された行動変容の語り
- 5.3 批判的思考と善意の再構成

第6章 制度・文化への定着と地域間の波及

- 6.1 制度化のプロセス：試行から「手続き」へ
- 6.2 文化としての定着：語り・習慣・関係の継続
- 6.3 波及とスケール：地域内の連鎖、地域間の伝播、次世代への継承

終章 総括と今後の展望

- 7.1 6 カテゴリーの循環構造と相互作用
- 7.2 岡山 ESD プロジェクトの価値と課題（調査結果に基づく）
- 7.3 持続可能な社会に向けた教育の可能性

はじめに

研究目的と主題

本研究調査は、持続可能な社会の創造に向けた教育実践における変容プロセスを明らかにすることを目的とし、質的研究手法として M-GTA (Modified Grounded Theory Approach) を採用した。M-GTA とは、インタビューなどで得られた語りから、体験者の変化や成長のパターンを見つけ出す分析手法である。M-GTA は、グラウンデッド・セオリー・アプローチ (GTA) を基盤としつつ、より実践的かつ初心者にも扱いやすいように改良された手法であり、特に教育・看護・福祉などのヒューマンサービス領域において広く活用されている^{[1][2]}。

方法論の概要

M-GTA の特徴の一つは、研究者自身の問いか立場を明示したうえで、対象者の語りに寄り添いながら意味の構造を抽出する点にある。分析においては「分析焦点者」(インタビューを受ける人の立場で考えること)を設定し、対象者の視点を通してデータを読み解くことが求められる。これは、研究者が単なる観察者ではなく、対象者との関係性の中で意味生成に関与する存在であることを前提としている。

調査設計・対象

本研究は 2025 年 1 月から 2025 年 3 月にかけて実施した。岡山 ESD プロジェクトに 2 年以上継続的に参加している 11 名を対象者として選定し、目的的サンプリングによりプロジェクト事務局経由で協力を依頼した。対象者の内訳は、教育関係者 5 名（高校教員 3 名、小中学校教員 2 名）、企業・自治体関係者 3 名、地域活動関係者 3 名である。プロジェクトへの参加歴は 2-5 年が 6 名、5 年以上が 5 名である。インタビューは 1 人あたり 60-90 分程度とし、岡山市内の会場で原則として対面で実施した（一部オンライン併用）。研究デザインは横断的調査である。

研究目的と課題の整理

本研究では、岡山 ESD プロジェクトに参加した人々の語りを通じて、次の 3 点を明らかにすることを目指す。

- 1) プロジェクトの基本構想に掲げる「課題解決力」「批判的思考力」「協働力」「行動変容力」「地域貢献力」が、どのように育まれているか。
- 2) それらの力の育成において、変容の契機となった場や出来事は何か。それはどのように意味づけ・価値づけられているか。
- 3) 岡山 ESD プロジェクトの課題と、今後重点的に取り組むべき内容は何か。

調査手続きと分析姿勢

本研究において筆者は、対象者との信頼関係を構築しながらインタビュー調査を実施し、語りの中に含まれる内的変容や実践の意味を丁寧に抽出した。なお、インタビュー記録のテキスト化および初期的なカテゴリー化については、タイナーズ社およびスタッフエージェント社に外注し、所属機関の倫理審査委員会の承認および関係者の承諾を得た上で実施している^[3]。

外部委託による処理にあたっては、筆者の立場や先入観が対象者の語りに過度に反映されることのないよう、冷静かつ客観的な姿勢を保つことに留意した。特に、外注による初期処理が分析に影響を及ぼす可

[1] 木下康仁（2007）『ライブ講義 M-GTA 実践的質的研究法』弘文堂

[2] 木下康仁（2016）「M-GTA の基本特性と分析方法—質的研究の可能性を確認する—」『医療看護研究』13巻1号, pp.1-11

[3] テキスト化および初期カテゴリー化は、タイナーズ社およびスタッフエージェント社に委託。委託に際しては、所属機関の倫理審査委員会の承認を得ており、対象者および関係者にも事前に説明・同意を得ている。

能性についても慎重に検討し、最終的な概念生成においては、研究者自身が語りの文脈と意味を再確認しながら、M-GTA の枠組みに則って理論的記述を行った。分析の妥当性確保のため、概念生成とカテゴリー化の各段階において、語りの原文に立ち返った検証を繰り返し実施した。

本章の位置づけ

以上のように、本研究は M-GTA の方法論的枠組みに基づき、対象者の語りを通して教育実践における変容の構造を理論的に記述することを目指すものである。なお、本研究の M-GTA によるカテゴリー生成はヒアリング（n=11）を主要資料とし、アンケート（n=14）は傾向把握・補助的コード化に限定して活用した。

凡例：岡山 ESD プロジェクトの主要事業

- ESD コーディネーター研修：地域課題解決を担う人材を対象とした年次研修。共通言語と進め方を整える。
- ESD カフェ：市民・学校・企業・NPO など多様な立場がテーマをもとに対話する場。
- ESD 岡山アワード（ESD Okayama Award）：国内外の優れた ESD 実践を顕彰・共有する国際的な表彰制度。
- 岡山県ユネスコスクール高校ネットワーク実践交流会：高校生主体の実践発表・交流の場。
- おかやま ESD フォーラム：アワード受賞団体や中高生の取組を紹介する年次フォーラム。
- おかやま SDGs・ESD なび：岡山市公式ポータルサイト。事業情報・記録を集約。
- グローバル RCE 会議（岡山開催）：国連大学主催の国際会議。岡山は 2014 年と 2025 年に開催。

第 1 章 理念の内面化と価値観の変容

【インタビュー調査対象者について】

本章で分析するのは、岡山 ESD プロジェクトに継続参加している 11 名（A～K）の語りである。対象者の属性は以下の通りである：

■ 教育関係者（5 名）

A=企業社員・ユース世代（参加歴 3 年）／B=高校教員（ユネスコスクール）・ユース世代（参加歴 4 年）／C=企業社員（参加歴 5 年）／D=高校教員（管理職）（参加歴 7 年）／E=自治体職員（参加歴 15 年以上）

■ 地域・NPO 関係者（6 名）

F=小学校教員（ユネスコスクール出身・ユース世代）（参加歴 2 年）／G=中学校教員（ユネスコスクール出身・ユース世代）（参加歴 3 年）／H=公民館職員（世界会議経験者）（参加歴 8 年以上）／I=高校教員（ユネスコスクール勤務経験者）（参加歴 5 年）／J=NPO 職員・ユース世代（参加歴 4 年）／K=NPO 職員（参加歴 6 年）

本文中では引用の後に（A）のように記号で示す。

1.1 ESD 理念の受容と再定義

ESD（持続可能な開発のための教育）は、初学段階では抽象的に受け取られやすい概念である。しかし、具体的な実践や対話の場に身を置くことにより、参加者は自らの経験と言葉に引き寄せて理解を深め、次第に「自分の言葉」で語れるようになる。

企業に勤務するユース世代の参加者は、ESD カフェでの体験を通じて概念理解について次のように語っている。

「言葉が難しいと感じたが、発表を聞いて、こういうことかと理解できた」（A）

また、企業で SDGs 推進に携わる参加者は、既存の知識との関連について述べている。

「会社で SDGs を知り、そこから ESD も少しづつ理解した」（C）

高校管理職の教員は、視点の獲得について語る。

「環境メガネをかけると、今まで見えなかつたことが見えてくる」(D)

公民館職員は、継続的な学習の重要性について述べている。

「研修で形が見えてきて、経験を重ねるうちにできるようになった」(H)

これらの語りから明らかになるのは、概念の受容が「理解のきっかけ（他者の発表・研修）→自分の経験への当てはめ→語彙と視点の獲得」という段階をたどることである。特に「視点（環境メガネ）」の獲得は、日常の判断基準を更新する契機となる重要な転換点であることが確認される。

1.2 理念を行動指針へ翻訳する転換

理念理解が深化すると、参加者はそれを日常の運用や場づくりに翻訳する。この翻訳過程は、個人の内面にとどまらず、所属組織や活動現場における具体的な変化として観察される。

企業で森林業に従事する参加者は、組織の外部に対する姿勢の変化について語る。

「外の人を招いたり、社外に出ていくことが増えた」(C)

高校教員は、学びの出発点としての「問い合わせ」の重要性について述べている。

「問い合わせ立てるのが一番難しいが、困ることから学びが始まる」(I)

NPOで若者支援に携わる参加者は、支援の視点の変化について語る。

「若者の場では、どうやったら力を發揮できるかを話し合う」(J)

小学校教員を務めるユース世代の参加者は、説明責任について述べている。

「人前で説明した経験が、自分の理解を深めた」(F)

これらの語りから見えてくるのは、個人の理解の深化が、組織の意思決定や運営方針に具体的な変化をもたらしていることである。発表・説明の機会は単なる伝達ではなく、思考を再構成し、評価観や運用ルールの見直しを促す装置として機能している。

1.3 内面化の兆候

ESD 概念の内面化（理念が個人の判断基準として定着すること）の進展は、語彙の定着、説明可能性の向上、継続意欲の表明として現れる。

高校教員を務めるユース世代の参加者は、他者の実践への触発について語っている。

「先輩の発表を見て、私もやってみたいと思った」(B)

中学校教員を務めるユース世代の参加者は、活動の持続可能性について述べている。

「一度で終わらせらず、続けるには仕組みが必要だと気づいた」(G)

これらの語りは、個々人の具体的な参加や参画の経験を通じて形成された ESD への理解が、その後の行為や制度設計に結びついていることを示している。特に、属人的努力に依存せず、仕組みとして継続させる発想の芽生えは、内面化の成熟度を測る重要な指標である。

【小まとめ】

理念は、発表・研修・対話を媒介に自分の言葉へ再定義される。翻訳は、外部連携、問い合わせの設計、説明責任の履行といった実務の更新として現れる。語彙の定着、説明可能性、継続意欲は内面化の進展を示す。

第2章では、この理念の内面化が、異文化・異世代との出会いやネットワークを通じてどのように広がり、視野の拡張をもたらすのかを検討する。

第2章 多様な経験と出会いがもたらす視野の拡張

本章では、出会いと接続の仕組みがどのように設計され、比較・憧れ・刺激がどのように自己変容に結びつき、さらにネットワークが学びを日常に定着させるかを検討する。

2.1 異文化・異世代との接触が与える影響

岡山 ESD プロジェクトでは、ESD カフェ、SDGs に取り組むユースの活動報告や交流会、アワード等の場が継続的に開催され、出会いが常態化している。これらは単発のイベントではなく、定例の対話や共同発表、ふりかえりを重ねることにより、場づくりの設計原理が参加者間で共有されてきた。

企業に勤務するユース世代の参加者は、世界会議での体験について次のように語っている。

「高校生が英語で発表する姿を見て、かっこいいと思った。自分もやってみたいと思った」(A)

この語りは、大きな舞台や可視化の機会が、憧れを媒介に自己効力感を高め、行動意図を生むことを示している。世代や立場の異なる参加者が同じ場で語り合うことで、地域の歴史や文化と、若年層の新しい技術や表現が交差し、課題を一面的に捉えない態度が育まれている。反復的な接触は、こうした効果を一過性の感情に留めず、行動へ橋渡しする重要な機能を果たしている。

2.2 比較・憧れ・刺激による自己変容の契機

岡山 ESD プロジェクトの「他者と出会う仕掛け」は、参加者にとって自己変容の起点となっている。他者との比較は優劣の判断ではなく、自分の可能性を映す鏡として機能している。

企業で森林業に従事する参加者は、組織レベルでの学習機会について語る。

「社内で SDGs を知る機会があり、今後の発展のために取り組む話になった。それが ESD 理解にもつながった」(C)

理解の深化は第三者からの説明を受けるだけでは起きにくい。模倣が可能な具体（活動の手順、対話の型、記録の仕方）が提示され、試行・ふりかえりの循環が用意されていることで、無力感に留まらず、「次の一步」に接続される。

公民館職員は、継続的な研修の効果について述べている。

「研修で形が見えてきて、経験を重ねるうちにできるようになった」(H)

この種の接続は、ESD の理念の個人的内面化だけでなく、資源配分や目標設定といった組織的基盤の形成に寄与し、継続可能性の初速を与える重要な要素であることが確認される。

2.3 ネットワーク形成と学びの多様化

岡山 ESD プロジェクトの特徴は、ネットワークが設計された「学びの基盤」として機能している点である。ESD カフェや報告会は、単なる情報交換にとどまらず、役割の重なり（親・住民・教員・職員等）を可視化し、情報・機会・助言が循環する構造を持つ。

高校教員は、地域住民との対話の効果について語っている。

「地域の人と話し合う中で、ESD が自分にも関係あると感じた」(I)

NPO で若者支援に携わる参加者は、場の設計の重要性について述べている。

「研修ではファシリテーターが前のめりに関わり、参加者が自ら話し始める場がつくられていた」(J)

企業で森林業に従事する参加者は、地域の将来ビジョンについて語る。

「木を切って使ってまた植えるサイクルを回せる自然にしていきたい。地域の人にもそう思ってもらえる環境づくりをしたい」(C)

このプロジェクトで有効だったのは、共通の問い合わせ言語化と記録の共有（誰が、いつ、何を、どうしたか）をルーチンとして設け、参加の出入りがあっても合意の最小単位が保たれるようにした点である。これにより、学びは場当たり的な「イベント」ではなく、日常の実践へと定着する基盤が構築されている。

01

02

03

04

05

06

ESD の成果

【小まとめ】

異文化・異世代との接触は、憧れと模倣を媒介に自己効力感を高め、行動意図を生む。比較は、模倣可能な具体が伴うと「次の一步」の設計図となる。ネットワークは、共通の問い合わせ言語化・記録の共有を軸に、学びを日常へ定着させる。

第3章では、こうした出会いとネットワークが、参加者の主体性や内省をどのように育み、成長のプロセスを支えているのかを明らかにする。

第3章 主体性と内省を通じた成長のプロセス

岡山ESDプロジェクトでは、参加者が自らの実践を語り、問い合わせ立て、ふりかえる機会が意図的に設計されてきた。これらの仕組みは、単なる情報共有ではなく、自己理解の深化、探究的姿勢の醸成、価値観の再構築を促す学習プロセスとして機能している。本章では、語り・問い合わせ・ふりかえりを通じて主体性と内省がどのように育まれたかを検討する。

3.1 「伝えること」がもたらす自己理解の深化

岡山ESDプロジェクトでは、ESDカフェやSDGsに取り組むユースの活動報告や交流会、ESDアワード授賞式など、参加者が自らの実践を語る場が数多く設けられている。これらは単なる発表の場ではなく、語ることを通じて自分の実践を意味づける「ふりかえりの場」として機能している。

NPOで若者支援に携わる参加者は、語ることの効果について次のように述べている。

「なぜそれをするのかを話せるようになってきた。言えたことで、次の協力者が見つかる」(J)

この語りは、説明が自己理解の深化と他者との協働を同時に促すことを示している。語ることは、単なる情報伝達ではなく、自分の実践を再構成し、他者との関係性を再設計する行為である。

企業に勤務するユース世代の参加者は、語ることを通じた自己効力感について語る。

「自分も何かできるかもしれない」(A)

このように、岡山ESDプロジェクトの「語りの場」は、自己の経験を意味づけ、他者と共有する意志を育む仕組みとして機能している。語ることで自己理解が深まり、他者との協働につながる効果が確認される。

3.2 問いを立てる困難と探究的姿勢の醸成

岡山ESDプロジェクトでは、参加者が「問い合わせ」を持ち続けることを重視しており、そのための仕掛けが随所に組み込まれている。ESDカフェでは、毎回異なるテーマが設定され、参加者は自らの立場から問い合わせ立て、他者と対話することが促される。

小学校教員を務めるユース世代の参加者は、抽象的な理念を具体的な実践に引き寄せる過程について語っている。

「難しいことじゃなくて、学校や家で続けられるやり方を探す感じに変わってきた」(F)

この語りは、抽象的な理念を具体的な実践に引き寄せる過程を示している。前述(1.2)で高校教員Iも述べていたように、問い合わせ立てることは容易ではないが、その困難さ自体が学びの出発点である。岡山ESDプロジェクトでは、問い合わせを共有し、他者と検討する場を設けることで、探究的姿勢を持続させる仕組みを構築している。その過程は単なる技術的な課題設定ではなく、探究的姿勢を醸成し、実践の意味を再定義する重要なプロセスであることである。

3.3 語りに見る内省の構造と変容の兆し

岡山ESDプロジェクトでは、報告会やふりかえり会など、内省を促す「構造化された場」が意図的に設計されている。これらの場は、単なる感想共有ではなく、次の行動を設計するための内省を促す。

ユースの教員 G が内面化の過程で気づいた持続可能性への意識（前出 1.3）は、制度化の局面でも重要な視点となる。また、自治体職員は、実際の行動設計につながる内省について述べている。

「来年度はやめることと増やすことを決めたい」（E）

これらの語りから確認されるのは、内省を通じて価値観が再構築され、個人の変容が社会的な視野と結びつくプロセスである。参加者は単なる活動の感想にとどまらず、次年度の設計や長期的な展望を視野に入れた計画的思考を身につけ、継続的な改善の基盤を形成している。

【小まとめ】

語りの場（ESD カフェ、報告会など）は、自己理解を深め、他者との関係性を再構築する契機である。問い合わせる場（ESD カフェ、研修など）は、探究的姿勢を育み、実践の再定義を促す。ふりかえりの場（報告会、ふりかえり会など）は、内省を通じて行動や価値観の変容を支える仕組みである。

第 4 章では、こうして育まれた主体性と内省が、他者との協働やコミュニティ形成を通じて、どのように実践へと展開していくのかを明らかにする。

第 4 章 協働とコミュニティ形成のプロセス

岡山 ESD プロジェクトでは、協働を促す仕組みが意図的に設計してきた。単なる情報共有や役割分担ではなく、共通の目的を共有し、相互に学び合う関係性を築くことが重視されている。本章では、協働の基盤となる「場」の特徴、関係性の質を高める要素、そしてコミュニティとしての持続性を支える仕組みを検討する。

4.1 協働的実践の経験とリピーター意識

岡山 ESD プロジェクトの特徴的な成果として、参加者の継続的な関わりが挙げられる。ワークショップやまちづくりイベントへの参加経験は、参加者にとって一過性の体験にとどまらず、自発的な継続意欲を生み出している。企業に勤務するユース世代の参加者は、まちづくりワークショップの運営を通じて、参加者の反応について次のように語っている。

「結構その感想のときに、こういうワークショップをまた開いてほしいですか、また来たいですっていうのすごい言ってくれるんですよ」（A）

この語りから明らかになるのは、協働的実践が参加者に与える肯定的な体験の質である。堅苦しい印象を持たれがちなまちづくりワークショップにおいても、参加者が楽しみながら関わることができる場の設計により、自発的な継続参加への意欲が生まれている。これは、ESD が目指す持続可能なコミュニティ基盤の構築において、強制や義務感ではなく、内発的動機に基づく参加の重要性を示している。

4.2 包摂的な関係性と傾聴的态度の育成

協働を支える関係性の質的向上において、傾聴的态度の育成が重要な要素となっている。ユネスコスクール出身で現在高校教員を務めるユース世代の参加者は、発表や話し合いの経験を重ねる中で、自らの態度変容について次のように述べている。

「聞く姿勢っていうのはすごく意識するようになりました。人の意見聞いて、それ理解して、自分がどう思うか」（B）

こうした傾聴的态度は、教育現場での包摂的な対応として現れている。

「どんな生徒でも基本誰でも対応できる。話掛けやすい雰囲気があるのは、傾聴心というところが軸になっている」（B）

一方、NPO で若者支援に従事する参加者は、研修での体験を通じて場の設計の重要性について次のように語る。

「研修ではファシリテーターが前のめりに関わり、参加者が自分から話し始める雰囲気があった」(J)

これらの語りは、協働における傾聴的態度が単なる技術的なスキルではなく、多様性を包摂する関係性の基盤となっていることを示している。従来の「自分発信」中心の態度から、他者の意見に耳を傾け、理解しようとする柔軟な姿勢への変容は、ESD の理念が個人の日常的実践として内面化されている証拠である。また、適切な場の設計により、参加者の主体性を引き出すことが可能であることも確認される。

4.3 ネットワークを基盤とした地域連携の広がり

協働的実践を通じて形成されるネットワークは、地域連携の実践的基盤として機能している。アンケート調査に参加した教員は、ユネスコスクールのつながりについて次のように述べている。

「ユネスコスクールつながりで、他校と交流することが多くなり、知人が増えたので、困ったときに相談する相手が校外にもできた。このつながりは、教員だけでなく、市の職員、民間企業の方、また卒業生にも及ぶ」(アンケート参加者)

森林業に従事する企業の社員は、地域住民を巻き込んだ持続可能な社会づくりへの展望を語る。

「地域の方とか岡山の方にもそういうふうに思ってもらえるような環境づくりっていうのができたらなというふうに思ってます」(C)

これらの語りから浮かび上るのは、ESD プロジェクトが創出する異分野・異世代にまたがるネットワークの実践的価値である。単なる人的つながりを超えて、課題解決や相談の場としての機能を果たし、さらには地域の将来ビジョンの具体化にも寄与している。このネットワークは、持続可能な社会づくりに不可欠なソーシャルキャピタルとして機能し、個人の成長と地域社会の発展を同時に支える基盤となっている。

【小まとめ】

岡山 ESD プロジェクトにおける協働とコミュニティ形成は、協働的実践の肯定的経験によるリピーター意識の形成、傾聴的態度に基づく包摂的関係性の構築、そして異分野・異世代ネットワークによる地域連携の広がりという三つの要素によって支えられている。これらの要素が相互に作用することで、持続可能なコミュニティの形成が実現されている。

第 5 章では、こうした協働の基盤が、当事者意識と社会的行動への展開にどのように結びつくのかを検討する。

第 5 章 当事者性・行動・継承・制度化・波及・評価

本章では、岡山 ESD プロジェクトにおいて、参加者が当事者として行動を起こし、それがどのように広がり（波及）、組織や地域に根づき（継承・制度化）、さらに振り返りと評価の仕組みによって維持・改善されているかを検討する。特徴は、個人の気づき→小さな行動の開始→協働を通じた拡張→仕組み化→評価と修正という循環が、意図的に設計された「場」と「記録」によって支えられている点にある。

5.1 当事者性の形成と行動の開始

当事者性は、遠くにあった課題を「自分の課題」として引き寄せる経験から始まる。岡山 ESD プロジェクトでは、発表・対話・体験の場が連続的に用意され、参加者は模倣可能な具体に触れながら小さな行動を始めることができる。

企業に勤務するユース世代の参加者は、ESD カフェでの体験を通じて、課題設定のハードルについて次

のように語っている。

「身近なエピソードでもよいのだとわかった。思ったよりハードルが低いと感じた」(A)

また、異世代交流による刺激も重要な要素である。企業で森林業に従事する参加者は、高校生との交流について述べている。

「高校生と直接話す機会が多く、新しい見方に刺激を受ける」(C)

これらの語りから見えてくるのは、当事者性の形成における「身近さ」と「刺激」の重要性である。抽象的で遠い課題も、身近なエピソードから始められることを知ることで心理的ハードルが下がり、異世代との交流により新たな視点を得ることで行動への意欲が高まる。小さな行動は個人の範囲にとどまらず、周囲との関係の組み替えを伴うことが確認される。

5.2 実践の拡張と社会的波及

行動は、他者との比較や憧れ、共同作業を通じて拡張する。岡山 ESD プロジェクトは、越境的な出会いの機会を制度的に確保し、活動の連鎖を後押ししてきた。

高校の管理職を務める教員は、世界会議での体験について次のように語っている。

「世界会議では、生徒が主体的に動き、学校種を超えた実行委員会が成立していた。そこから学ばない手はないと思った」(D)

NPO 職員は、ESD の国際的な視野について述べている。

「世界をつなぐ ESD という言葉が素晴らしいと感じた。地域の実践が他所にも役立つはずだ」(K)

自治体職員は、人材育成の循環について次のように語る。

「教える人を育てる循環をつくった。講師を候補に挙げ、事前研修を重ねて本番ではメインに据えた」(E)

これらの語りは、実践の拡張における三層の広がりを示している。(1) 場の越境（学校・地域・企業・行政）、(2) 役割の移行（学ぶ側→伝える側）、(3) 外部接続（他地域・他国・他制度）という構造により、個人の成長と同時に、人材層の厚みを生み、地域に波及の回路を形成していることが確認される。

5.3 継承・制度化・評価の仕組み

実践を持続可能にするには、属人的努力に頼らない仕組み化が必要である。岡山 ESD プロジェクトでは、カリキュラム化、研修制度、共通記録の運用などを通じて、活動の継承と評価の基盤を整ってきた。

高校の管理職教員は、学校再編の機会を活用した制度化について語る。

「学校再編の機会に、環境教育を学校設定教科として位置づけた」(D)

自治体職員は、コーディネーター研修の発展について述べている。

「コーディネーター研修で、複数回受講者を講師候補に育て、事前研修を重ねて本番でメイン講師を担ってもらった」(E)

NPO 職員は、地域主体の取り組みについて次のように述べている。

「地域で ESD の略や方針を皆で考えてつくった。地域に定着している」(K)

これらの語りから明らかになるのは、制度化が(a)構造（教科・研修・担当制・予算）、(b)ルーチン（定例会・記録・ふりかえり）、(c)共有知（共通言語・評価軸）の三点を軸に進んでいることである。評価は実施結果の集約にとどまらず、次年度の資源配分の見直しとセットで運用されることで、改善を前提とした継続が可能となっている。

【小まとめ】

当事者性は、模倣可能な具体と試行の反復により、小さな行動として立ち上がる。行動は、越境的な出会い・役割移行・外部接続を通じて拡張し、地域に波及する。継承・制度化・評価は、構造・ルーチン・共有知を支えに、改善を前提とした継続を可能にする。

第 6 章では、こうした実践が制度や文化にどのように定着し、地域内外へどのように波及していくのかを明らかにする。

第6章 制度・文化への定着と地域間の波及

本章は、岡山ESDプロジェクトの実践が制度（手続き・運用）と文化（ふるまい・関係性）の両面に定着し、地域内外へ伝播するプロセスを、調査結果とストーリーラインに即して整理するものである。

6.1 制度化のプロセス：試行から「手続き」へ

岡山ESDプロジェクトでは、個々の取り組みが試行→手続き化（標準化）→予算化・担当化→評価・改善の段階を経て制度に組み込まれてきた。M-GTA分析結果図・ストーリーラインに示された「共通言語／対話の場／記録と共有」の三要素が、制度化の主要なトリガーである。

共通言語の制度化において、コーディネーター研修や高校ネットワーク実践交流会で共有された視点が、学校・職場の年間計画・研修テーマ・評価観点として明記される。学校では、総合的な学習や学校設定教科に「持続可能性の視点」を組み込む運用が進められてきた。

対話の場の制度化では、ESDカフェ等で蓄積された安心して語り・聞く進め方が、校内研修・自治体ワークショップ・企業勉強会の手順として定例化している。参加者が自発的に発言できる雰囲気づくりの手法が標準化され、各組織の研修設計に取り入れられている。

記録と共有の制度化では、SDGsに取り組むユースの活動報告や交流会・アワードで蓄積された実践記録が翌年度の設計に参照され、予算要求・連携依頼の根拠資料として機能している。人材育成の循環的な仕組みが、研修プログラムの標準的な運用として定着している。

これらは、岡山における「場の設計」→「手続き」への移行として把握でき、新規参入者の入口を広げる効果を持つことが調査から示唆される。制度化により、個人の熱意や経験に依存しない持続可能な運営基盤が構築され、ESDの理念と手法が組織の日常的な活動に組み込まれることで、プロジェクトの継続性と拡張性が担保されている。

6.2 文化としての定着：語り・習慣・関係の継承

制度が「ルール」を整えるのに対し、文化の定着は日常のふるまいを変える。岡山では「まず聞く」「つなぐ」「記録する」が習慣化している。

高校教員が述べるように、失敗を受け入れる文化が形成されている。

「失敗を受け入れ、一緒に考えるところから学びが生まれる」(I)

また、担い手の世代交代において、若手・ユースが進行を段階的に引き継ぎ、暗黙知が言語化されて共有知となる。また、支援の視点転換について先述したJ(1.2)の観察は、文化定着の過程としても捉えられる。さらに、語りの共有と再解釈において、報告・発表・ニュースレター・ウェブ記録が語りの器となり、成功・失敗の含意が次の実践へ渡される。

NPO職員が語るように、

「地域でESDの略や方針を皆で考えてつくり、定着している」(K)。

これらは「皆で守りたくなる流儀」の形成と見なすことができ、制度と文化が両輪として機能していることが確認された。

6.2 文化としての定着：語り・習慣・関係の継承

制度が「ルール」を整えるのに対し、文化の定着は日常のふるまいを変える。岡山では「まず聞く」「つなぐ」「記録する」が習慣化している。

高校教員が述べるように、失敗を受け入れる文化が形成されている。

「失敗を受け入れ、一緒に考えるところから学びが生まれる」(I)

また、担い手の世代交代において、若手・ユースが進行を段階的に引き継ぎ、暗黙知が言語化されて共

有知となる。また、支援の視点転換について先述した J (1.2) の観察は、文化定着の過程としても捉えられる。さらに、語りの共有と再解釈において、報告・発表・ニュースレター・ウェブ記録が語りの器となり、成功・失敗の含意が次の実践へ渡される。

NPO 職員が語るように、

「地域で ESD の略や方針を皆で考えてつくり、定着している」(K)。

これらは「皆で守りたくなる流儀」の形成と見なすことができ、制度と文化が両輪として機能していることが確認された。

6.3 波及とスケール：地域内の連鎖、地域間の伝播、次世代への継承

定着した実践は三つの回路で広がることが明らかになった。**地域内の連鎖（水平展開）、地域間の伝播（越境共有）、次世代への継承（人のスケール）**である。

中学校教員・ユース世代の参加者 G が語るように、持続可能な仕組みへの意識が重要である。また、ここでの ESD の「波及」とは規模の拡大だけを意味せず、自立した場が増え、つながりが残ることが持続的拡張の鍵であることが確認された。

【小まとめ】

制度化：共通言語・対話設計・記録共有が手続きに落ち、入口を広げる。

文化化：聴く・つなぐ・記録するが日常化し、語りが再解釈されて共有知となる。

波及：設計原理が地域内で連鎖し、地域間で再設計され、役割移行を通じて次世代へ継承される。

終章では、これら 6 つのカテゴリーがどのように循環していくのかについて述べ、岡山 ESD プロジェクトの持つ価値と課題、そして他地域への示唆を総括する。

終章 総括と今後の展望

本章は、岡山 ESD プロジェクトの分析成果を「六つのカテゴリー循環」として総括し、調査に基づく範囲で理論的含意と実践的示唆を述べる。

7.1 6 カテゴリーの循環構造と相互作用

M-GTA により抽出された六つのカテゴリー：①持続可能性・ESD 理念の内面化・拡張／②多様な経験・出会い・ネットワーク／③主体性・内省・成長の促進／④協働・コミュニティ・ネットワーク形成／⑤社会・地域課題への当事者性・行動／⑥継承・制度化・波及・評価は、直線的な段階ではなく、循環として機能している。

この循環の駆動力は役割移行である。ユース・若手が学ぶ側→伝える側→支える側へと段階的に移行することで、人材層が厚みを増し、循環は人を媒介として持続する。自治体職員が語るように、

「教える人を育てる循環を設け、事前研修を経て本番でメイン講師を担ってもらった」(E)

この語りが示すのは、単なる知識の伝達ではなく、教える立場への段階的な移行を通じて学習が深化し、同時に新たな担い手が継続的に育成される仕組みである。こうした役割移行こそが、6 つのカテゴリーを循環的に駆動し、岡山 ESD プロジェクトの持続性を支える核心的メカニズムとなっている。

7.2 岡山 ESD プロジェクトの価値と課題

岡山 ESD プロジェクトの価値として、①学び方の転換（対話・協働・省察）を日常化する場の設計、②ユースを含む役割移行の階段、③記録と共有に基づく次年度設計の三点が確認できる。

一方、課題として、概念の抽象性による理解の難しさが挙げられる。自治体職員が述べるように、「ESDはやってどうなるのかが見えにくい」(E)。

この語りは、ESDの抽象性が実践者の動機形成や継続意欲に影響を与えることを示している。特に自治体職員の立場では、事業の成果や波及効果を説明可能な形で示す必要があり、「見えにくさ」は制度化・評価の障壁となる。今後は、ESDの実践が人と地域社会にもたらす前向きな変化を、定性的・プロセス的に捉える評価手法を積極的に取り入れる必要がある。

7.3 他地域への示唆（再設計可能な単位）

岡山の経験から抽出した設計原理は、①共通言語の整備、②安心して話せる対話設計、③小さく記録してすぐ共有、の三点である。これらは「やり方の移植」ではなく、現場で再設計可能な原理として提示している。M-GTA分析で示された6カテゴリー循環（理念→出会い→内省→協働→行動→制度化）は、岡山固有の仕組みに依存しない学習プロセスの構造である。他地域での応用は、この循環を支える「場の設計」「役割移行」「記録共有」を、地域の制度・文化・資源に合わせて再構築することにかかっている。

結びにかえて：人が育ち、社会が変わる

岡山ESDプロジェクトの分析から明らかになったのは、ESDの理念を自らの言葉で語り、異なる立場の人と協働し、地域に働きかけるという往復運動が、プロジェクト参加者の価値観や行動を変え、地域社会に新たな関係性を生み出してきた事実である。こうした変化は、ESD for 2030が掲げる「知識・スキル・価値・態度・行動」を統合的に育む方向性と重なると同時に、岡山がRCEおよびホール・シティ・アプローチを通じて都市全体に根づかせてきた実践の成果でもある^{[1][10]}。

一方で、課題も明確になった。「ESDはやってどうなるのかが見えにくい」という語りに象徴されるように、成果の可視化は容易ではなく、制度化や政策判断に必要な説明責任を果たすことが難しい。国際的にも、Jicklingは「持続可能な開発のための教育」という目的先取りの言説が教育の自由を損なう危険を指摘しており^[2]、WalsはESDが行動の誘導に偏る道具主義へ傾斜しうることへの懸念を示している^[3]。またSelbyは、自然や地域を単なる資源として扱う発想を批判し、関係性や場所性を重視する学びの必要性を論じている^[4]。これらの批判は、岡山の経験を過度に理想化せず、ESDの本質を問い合わせ続けるための重要な視座となる。

今後求められるのは、岡山で構築された仕組みを「やり方」としてではなく「設計原理」として提示し、各地域の制度・文化・資源に応じて再構築することである。また、数値化しにくい成果一例えば、価値観の変容や協働関係の質といったことなどをどのように評価し、社会に説明するかという課題にも取り組む必要がある。国際的には変容的・社会的学習に関する評価の視座が提案されているが^[3]、日本の文脈に即した手法は十分に整備されていない。これらの開発は、ESDの持続性を支える次の重要課題である。

数値になりにくい成果一語りの質の変化、関係性のしなやかさ、役割移行（学ぶ側→伝える側→支える側）の進行は、特に急速に変化し、効率や即時性が重視される現代社会において、「見えにくい」だけでなく、評価されにくいものである。岡山ESDプロジェクトでは、小さく記録し、すぐ共有し、次年度設計に生か

[1] UNESCO. Education for Sustainable Development: A Roadmap (2020)
<https://unesdoc.unesco.org/ark:/48223/pf0000374802.locale=en>

[2] Jickling, B. (1994). "Why I Don't Want My Children to Be Educated for Sustainable Development." *The Trumpeter*, 11(3), 114–116.
<https://trumpeter.athabascau.ca/index.php/trumpet/article/download/325/498/>

[3] Wals, A. E. J. (2011). "Learning Our Way to Sustainability." *Journal of Education for Sustainable Development*, 5(2), 177–186.
<https://doi.org/10.1177/097340821100500208>

[4] Selby, D. (2017). "Education for Sustainable Development, Nature and Vernacular Learning." *CEPS Journal*, 7(1), 9–27.
<https://www.cepsj.si/index.php/cepsj/article/view/10>

すという地道な方法で、こうした成果を“物語”として社会に示してきた。これは、教育を道具主義に寄せすぎず、同時に公共への説明責任を果たすための、現実的な折り合いである^{[3][2]}。

岡山 ESD プロジェクトの強みは、日常化を志向しつつも、現場の実践から学びを抽出し再設計してきた点にある。ESD コーディネーター研修は共通言語と進め方を整え^[5]、ユネスコスクール高校ネットワーク実践交流会は越境的な学び合いを支え^[6]、ESD カフェは安心して語り、聞く反復の場を提供する^[7]。さらに、SDGs に取り組むユースの活動報告や交流会・ESD 岡山アワードが実践を記録・可視化し、次の挑戦へと循環させている^[8]。こうした仕組みが、学習一実装一省察一再設計のループを回し続け、人の成長と地域の変化を同時に駆動している。

以上より、岡山 ESD プロジェクトは、理念と実践、個人と社会、経験と理論が交差する場として、ESD の本質——人が育ち、社会が変わる——を体現していると言える。この実践は、ESD が単なる教育手法ではなく、社会変革を導く教育哲学でありうることを示している。ESD for 2030 が求めるローカルアクションの加速、RCE ネットワークによる相互学習、そして岡山発の顕彰・共有の仕組みが、各地での再設計を後押ししうることを、岡山の軌跡は証明している^{[1][9][10]}。

(付) 本論の意義と限界

- ・**意義**：岡山の具体的な仕組みに即して、ESD の基盤形成→行動→再解釈が循環する 6 カテゴリー・モデルを提示した点。これは ESD for 2030 の枠組みと接続しうる実践設計の単位を明確化した。
- ・**限界**：インタビュー（n=11）・アンケート（n=14）というスコープに基づくため、他地域への一般化には注意が必要。今後は縦断的追跡と比較事例（他 RCE ・非 RCE 地域）により、循環の安定性と再設計の条件を検証したい。RCE ネットワークやユネスコ関連のモニタリング資源の活用が有効である。

[5] 岡山市「令和 7 年度 ESD コーディネーター研修」<https://www.city.okayama.jp/sdgs-esd/0000063246.html>

[6] 岡山大学「岡山県ユネスコスクール高校ネットワーク 実践交流会」<https://edu.okayama-u.ac.jp/esd-topics/esd-topics-9321/>

[7] 岡山市「ESD カフェ紹介」<https://www.city.okayama.jp/sdgs-esd/0000038230.html>

[8] ACCU 「ESD Okayama Award 2025 募集告知」<https://www.accu.or.jp/en/news/20250512/>

[9] United Nations University, Global RCE Network <https://unu.edu/ias/global-rce-network>

[10] UNESCO article “Okayama: A city united for education for sustainable development”

<https://www.unesco.org/en/articles/okayama-city-united-education-sustainable-development>

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS

制 作 岡山 ESD 推進協議会（RCE 岡山）
岡山市 SDGs・ESD 推進課

発 行 月 2025年10月



岡山市の ESD・SDGs の取組み ▶

ISBN 978-4-600-01651-7